MARCH 12, 1921. NO. 7661

The Japanese American News

大正拾年三月十二日（土）第千七百六十一號

日米

THE JAPANESE AMERICAN
PUBLISHED DAILY AT
650 ELLIS STREET,
SAN FRANCISCO, CALIFORNIA.
PHONE PROSPECT 238.
ENTERED AT S. F. POST OFFICE
AS SECOND CLASS MATTER.
K. ABIKO, EDITOR & PROP.
SUBSCRIPTION RATES
IN ADVANCE
DAILY.....ONE YEAR..... $11.00
DAILY.....SIX MONTHS..... 5.50
DAILY.....ONE MONTH 1.00
SINGLE COPIES ..... 5 CENTS
BRANCHES
DENVER — SACRAMENTO.
FRESNO. — STOCKTON.
LOS ANGELES. — SAN JOSE.
NEW YORK. — SALT LAKE.
OAKLAND. — SEATTLE.
OGDEN. — VACAVILLE.
PORTLAND. — WATSONVILLE.

日米 隔離學校 實際的疏通

日本人學童隔離學校案、加州々會下院教育委員會を滿場一致にて通過したり。右はサンルイスオビスポ郡選出グリーン氏提出の案にて、提出者の說明によれば、地方村落の小學校中に風、英語不十分にて學業發達遲々たる日本人兒童多數就學せるものあるを以て、斯かる地方村落に於ては、日本人其他の東洋人學童だけを、州教育行政上の區劃を無視して別に隔離學校を設け之に收容教育せんとするものなりといふ。下院本會議や上院の形勢は不明なれど、此分にては通過成立するやも知れざるを以て、豫め相當の諒解を各地方の學務員、教育當局者等とつけ置くを必要とすべし。何となれば同案は學務委員會に於て必要と認むる場合は隔離教育するを得るといふものにて、隔離すべきや否やを學務委員會の權能に任かせ居ればなり。案するに此案は憲法違反なるべき疑ありて、日本に出生したる兒童風兎も角、本國領土内にて出生したるものは米國籍を生れながらに取得し米國憲法により總べての他の米國出生兒と同一平等の權利特權を有するものなるが故に、其親が日本人なるの理由を以て教育行政上定められたる其區域内の學校に入ることを拒絕せられ不平等の待遇を與へらるべき筈無ければなり。更に又日本兒童の場合は往年國際問題となりて大騷ぎしたる事あり、當時日本政府の主張は教育を受ける權利は、條約保障の居住權の中に含まれ居るといふに在りて、多少無理なる解釋と云ひ得べきものなるが、兎も角も當時のルーズヴェルト大統領に一切を委託して其解決を任かせて、政治的に解決を告げ、隔離するを得たといふにて落着したるものなれば此先例に動するも云ひ得べきものなり。從て爭へば爭ひ得らるゝものにて、其餘地は十分に在れども、時節柄大局の爲めに公然抗爭するを賢なりとするや否や疑問なり。故を以て各地方在住の邦人が友誼的に各地方村落の教育當事者及び學務委員等と諒解を遂げて、適當なる疏通の途を發見するを第一とすべし。夫れには第一に各兒童の英語不十分なる點を補ひ、行儀作法等にも一段の注意を爲して白人兒童に比し決して學業の進歩遲からず、服裝も清潔衛生的なるに一段の注意を爲し、何等隔離の實際的必要無きやうにし、隔離學校に送らるゝといふことになれば、或は三哩も五哩も遠くに通はざる可からざる事になるやも知れずして、子供の爲めに可愛相なるのみならず、風雨に際しては自然缺席勝ちになりて、其爲めに學業進歩にも累せらるゝ事慨なきを、良く了解せしむる事とすべし。殊に隔離學校は假りて違憲ならずとするも、他の學校と同一の設備を爲し、同じ資格の教師を附せざる可かるすして、其地方の教育費は結局二倍に膨脹すべき所以をも知悉せしむべし。斯くて諒解も成り、日本人學童あることにより學務員、教育當局者等に何等の不良影響無く學業の進歩にも累を爲さず、却て勵みとなることの明瞭になるならば、隔離問題は自然立ち消ねとなるべし。隔離問題は日本人學童の方が白人學童よりも多い所、又は三四割以上を占むる處乃至は支那賭博場附近に日本人居住區域あり、一般の印象の如く平靜なり反動革命の浮說は露國過激派と英米兩國との通商條約の成立を妨害せんとする反過激派の所爲なるべくモスコーに少しも影響せられずと（紐育發）

●反過激派はクロンスタットに追込まれ籠城狀態を呈しつゝあり（倫敦發）

露國反過激諸派代表者はエソーニア首府レーヴァル港にヴォランスキー將軍を首相とする臨時政府を組織し近日過激派討伐を計畫中なりと（倫敦發）

●反過激諸派臨時政府計畫

倫敦着の最近の諸報知に依れば、モスコー革命說は浮說にてモスコーには勞働者の示威運動行はれたるに過ぎず尙ほクロンスタット要港なる反過激派が一時ペトログラードを威嚇せるは事實なるが反過激派はクロンスタットに追込まれ籠城狀態を呈しつゝあり（倫敦發）

歐洲新情勢電報（三月十一日聯合通信）

●伯林過激派の示威

伯林の社會共產黨はルストガルテンに集會を催し英佛資本家政府の償金要求を非難し伯林政府を倒して露國過激派政府に似たる無產階級の政府を組織するの必要を說きそれよりウンタルデル・リンデ廣小路に集團進行をなし示威運動を試たり（伯林）

●占領地方獨逸勞働罷業說

聯合軍が今回新たに占領せる獨逸ルール地方の工場勞働者及び鑛山勞働者は聯合軍の占領に對する反感を示すべく近日總同盟罷業を斷行せんとの說あり（デユセルドルフ發）

●ライン河畔米軍方針說明

ライン河畔コブレンツ地方駐屯米軍司令官アレン少將は米軍はデユセルドルフ外二市占領聯合軍に參加せざ米軍はライン河畔の關稅其他に關するライン河畔占領地聯合列强特使團の決議に從つて行動を取る旨發明せり（ロ市發）

●獨逸議會償金討議

獨逸國民議會は倫敦賠償會議萬席特使なる外相ヂモンス博士の伯林歸着を機會として償金問題を討議せりヂモンス博士は『余は英佛の態度餘りに强硬なりしを以て本國政府と打合せずして逆襲提議の一部を修正せり』と說明せり

▲外相の償金交涉是認さる

人民黨及び國民黨の首相はヂモンス博士が任意の行動を取れるを非難せるが副宰相シフェル氏外數名の多數社會黨首領外相の立場を擁護せり尙內閣は既に外相の行動を是認せり（伯林）

●獨逸名政治家缺乏

英國首相ロイド・ヂョーヂ氏は獨逸が聯合列强の償金要求を拒絕して懲罰せらるゝことになれば國民を指導し得べき名政治家を有せざるに依る外相ヂモンス博士は聰明にして誠實なれども政治家として實目足らずと語れり（巴里發）

●英國勞働黨對獨政爭攻擊

英國勞働黨議員クラインス氏は償金問題討議の議會下院に於て首相ロイド・ヂョーヂ氏は先日獨逸の償金捻出は獨逸の經濟的回復に依る外なしと稱して經濟界に大打擊を與ふべき聯合軍の侵略を承認し國稅五割增しを斷行せんとするは不可なりと云ひて首相の對獨態度を非難せり（倫敦發）

●獨逸賠償船桑港航路就役

獨逸より賠償船として受取りたるキャプフェニスター號は除り に巨大にして引き合はずとの理由にて日本郵船會社にては引受けを拒みたるを今回東洋汽船會社にて引受け難破したる地洋丸代船として桑港航路に就つる事に決定したり

●濱口、鶴雄大尉投獄せらる

橫須賀鎭守府海軍大尉濱口鶴雄は軍事祕密を百萬圓にて米國大使館附海軍武官ワトソン氏に賣らんとし發覺投獄さる

●西川嘉門家宅搜索を受く

東京市道路局西川嘉門、電氣局原全路南氏疑獄事件にて家宅搜索を受く（西川嘉門氏は搜索を受けつゝ卒倒したり）

露國關係電報（三月十一日聯合通信）

●露都反動革命否定

紐育の露國過激派機關雜誌ソヴイト・ルシア着のモスコー電報によれば モスコー反動革命說は浮說にてモスコーは日曜日のニユー・イングランドの如く平靜なり反動革命の浮說は露國過激派と英米兩國との通商條約の成立を妨害せんとする反過激派の所爲なるべくモスコーに少しも影響せられずと（紐育發）

●反過激派はクロンスタットに追込まれ籠城狀態を呈しつゝあり（倫敦發）

●獨逸のシレヂア投票準備

獨逸政府は近く上部シレヂアに行はるべき住民一般投票に備へ利を得んが爲めにシレヂア住民にて全國に離散せる者約廿萬を無賃にてシレヂアに輸送しつゝあり（伯林發）

極東關係電報（三月十一日聯合通信）

●日本海軍擴張批評

東京の英字新聞ジャパンアドヴアタイザーは日本の海軍擴張計畫の詳細を掲げ『日本の海軍擴張は現代列强が平時に企てたる海軍擴張中最も驚くべきものなり』と論せり（東京發）

●駐米支那公使信任狀提出

顧維鈞氏に代りて駐米公使に任ぜられ先日華府に到着せる前駐英支那公使施肇基氏は十日大統領ハーディング氏に信任狀を提出せり尙は大紙幅は十日午後列國大使公使と最初の公式會見をなせり（華府發）

▲上海港灣改善會議は十月

來る十月十五日より上海港改善會議開かるべく該會議に日英佛米及び和蘭の技師參加せん（北京發）

勞働關係電報（三月十一日聯合通信）

●鐵道勞働賃金遞減

東部諸主要鐵道會社が從業員勞働賃金引下げを斷行するに決定東部諸主要鐵道と東部の鐵道に從つて賃金引下げをすべきを以て西部の主要鐵道も東部鐵道會社代表會議は未熟練勞働者及び半熟練勞働者の賃金を引下げ然る後に熟練勞働者の賃金を引下ぐる筈なりと云へり（倫敦發）

●埃太利議長獨逸に同情す

埃太利國民議會下院議長ワイスキル氏は埃太利は償金問題にて聯合列强より侵略を蒙り壓迫を受けつゝある獨逸に同情する旨公式に聲明せり（維納發）

●日本海軍擴張批評

東京の英字新聞ジャパンアドヴアタイザーは日本の海軍擴張計畫の詳細を掲げ『日本の海軍擴張は現代列强が平時に企てたる海軍擴張中最も驚くべきものなり』と論せり（東京發）

●駐米支那公使信任狀提出

顧維鈞氏に代りて駐米公使に任ぜられ先日華府に到着せる前駐英支那公使施肇基氏は十日大統領ハーディング氏に信任狀を提出せり尙は大紙幅は十日午後列國大使公使と最初の公式會見をなせり（華府發）

▲上海港灣改善會議は十月

來る十月十五日より上海港改善會議開かるべく該會議に日英佛米及び和蘭の技師參加せん（北京發）

勞働關係電報（三月十一日聯合通信）

●鐵道勞働賃金遞減

東部諸主要鐵道會社が從業員勞働賃金引下げを斷行するに決定東部諸主要鐵道と東部の鐵道に從つて賃金引下げをすべきを以て西部の主要鐵道も東部鐵道會社代表會議は未熟練勞働者及び半熟練勞働者の賃金を引下げ然る後に熟練勞働者の賃金を引下ぐる筈なりと云へり（倫敦發）

●米閣議勞働問題を審議す

露國過激派政府の修正條項に對する露國過激派政府の修正條項は婚約せる希臘ヘレネ女王殿下と獨逸王子との婚儀はアゼンスの宮庭寺院にて盛大に行はれたり因にカロル殿下は戰時中下級侍從武官の娘と戀に陷いて祕密に結婚せるが皇室の反對を受け悶々の情を消さんが爲めに東洋より米國に旅行せり（アゼンス發）

●在鄉軍人團活動

米國在鄉軍人團全國司令官ガルブレース大佐は十一日白堊館にハーディング大統領を訪問し來る四月に召集さるべき臨時議會に對する在鄉軍人團關係諸案を示し了解を求めたり（華府發）

●墨國人本國歸還

テキサス州の農園及び工業に使用されるべく戰時契約勞働者として入國せる墨西哥人約六千名は近日契約期限滿了となるを以て本日歸還の命令を受けん（テキサス州フォーウオース發）

●獨領佛獨人衝突

近日運命決定一般投票行はるべき獨逸上部シレヂア駐屯中の佛兵は獨逸人の襲撃を受け數名の負傷者を出せり（巴里發）

●墨國の武器引渡

聯合列强は墨太利講和條約に規定されたる列强に引渡すべき武器及び家畜の殘餘を至急引渡すべき旨通牒要求せり（維納發）

●ベ伯議會に入る

墨國臺灣前迄駐米獨逸大使なりしベルンストルフ伯は民主黨議員として今回議會に入れりと（伯林發）

●埃國の武器引渡

聯合列强は墨太利講和條約に規定されたる列强に引渡すべき武器及び家畜の殘餘を至急引渡すべき旨通牒要求せり（維納發）

●ベ伯議會に入る

墨國臺灣前迄駐米獨逸大使なりしベルンストルフ伯は民主黨議員として今回議會に入れりと（伯林發）

●インデアン請願

インデアン諸種族の代表者團は內務卿フォール氏を訪問しインデアン統治及び保護に就てインデアンの希望を參酌することを亞米利加インデアン協會長なるネブラスカのスローン氏を內務省インデアン局長にすると等を請願せり（華府發）

●巴奈馬對米拒絕

巴奈馬政府は巴奈馬とコスタリカとの紛爭に對する米國政府の干涉を拒絕する旨通牒し來れり（華府發）

●中米聯盟に哀訴

巴奈馬共和國政府は米國の巴奈馬コスタリカ紛爭干涉に反對すべく國際聯盟に哀訴せりと云へり（ゼネヴア發）

●米國墨哥政府承認期近し

ハーディング大統領は墨西哥オブレゴン政府承認條件に就き交涉を行ひつゝあり

●英高間通商困難

露國過激派の英國特派使節クラシン氏は英露通商條約元案に對する露國過激派政府の修正條項は婚約せる希臘ヘレネ女王殿下と獨逸王子との婚儀はアゼンスの宮庭寺院にて盛大に行はれたり因にカロル殿下は戰時中下級侍從武官の娘と戀に陷いて祕密に結婚せるが皇室の反對を受け悶々の情を消さんが爲めに東洋より米國に旅行せり（アゼンス發）

●在鄉軍人團活動

米國在鄉軍人團全國司令官ガルブレース大佐は十一日白堊館にハーディング大統領を訪問し來る四月に召集さるべき臨時議會に對する在鄉軍人團關係諸案を示し了解を求めたり（華府發）

●墨國人本國歸還

テキサス州の農園及び工業に使用されるべく戰時契約勞働者として入國せる墨西哥人約六千名は近日契約期限滿了となるを以て本日歸還の命令を受けん（テキサス州フォーウオース發）

●獨領佛獨人衝突

近日運命決定一般投票行はるべき獨逸上部シレヂア駐屯中の佛兵は獨逸人の襲撃を受け數名の負傷者を出せり（巴里發）

●埃國の武器引渡

聯合列强は墨太利講和條約に規定されたる列强に引渡すべき武器及び家畜の殘餘を至急引渡すべき旨通牒要求せり（維納發）

●ベ伯議會に入る

墨國臺灣前迄駐米獨逸大使なりしベルンストルフ伯は民主黨議員として今回議會に入れりと（伯林發）

●インデアン請願

インデアン諸種族の代表者團は內務卿フォール氏を訪問しインデアン統治及び保護に就てインデアンの希望を參酌することを亞米利加インデアン協會長なるネブラスカのスローン氏を內務省インデアン局長にすると等を請願せり（華府發）

●巴奈馬對米拒絕

巴奈馬政府は巴奈馬とコスタリカとの紛爭に對する米國政府の干涉を拒絕する旨通牒し來れり（華府發）

●中米聯盟に哀訴

巴奈馬共和國政府は米國の巴奈馬コスタリカ紛爭干涉に反對すべく國際聯盟に哀訴せりと云へり（ゼネヴア發）

露國關係電報（三月十一日聯合通信）

●東宮殿下香港御着

▽十三日新嘉坡着豫定

三月三日軍艦香取、鹿島にて横濱發御渡歐の途に就かせられたる東宮殿下には海上無事十日香港に御着ありたれど御上陸遊ばされず艦上にて在留邦人代表者其他の奉迎を受けさせらる新嘉坡には十三日朝御着の豫定なり

本社東京特電（三月十一日午前九時着電）

露國の反過激派革命は失敗に終らんとするが如し。レニン、トロツキー等々は國外に逃亡する如く傳へたる電報は、叛徒クロンスタッドに追込められたるを報せり。革命軍指揮の爲め急ぎ歸國せりと傳へられたるケレンスキー氏は巴里より倫敦に急ぎ歸國

◆遲れ馳せの不景氣で苦しむ南米諸國

＝世界的恐慌波動が今頃及んでる

▼高い日米品を思惑買ひして手を焼き貯藏庫に充滿する▲

玖馬を振出しに亞爾然丁、智利、秘露及びウルガイの南米諸國を巡視して歸途來桑した三井物産社員松島文衛氏は語る『私は三年間紐育支店に在勤してゐたが

▼約三ケ月間各地巡視して來た、靜洋丸で歸へる皆の處春洋丸に乗換へて出發することになつた、南米諸國は世界的不景氣の影響を受けて遲れ馳せながら昨今非常に惡化して來た、秘露の砂糖、棉、智利の硝石、伯剌西爾の珈琲、羊毛畜産物等其國の重要産物も世界的

▼不景氣の風に遭つて輸出がパッタリ止み市價が暴落した、不景氣の風が米國から玖馬りれから南米へ順々に移つて秘露抔は米國と關係多いだけに打撃も多い、ウルガイは羊毛の暴落で羊毛に投資した銀行が倒れ

▼恐慌の來るのも遲かつた、茲に滯積なる南米諸國が日本が昨年春恐慌で物價が下落したのを見て安いものを買へて五六月頃日本に陶器絹物雜貨類を多量に註文した、それが南米に着く頃更に下落して一二割位下落した時に無暗に買つた結果引續き下落に遭つて忽ち大損をしたと云ふ始末

▼米國からも歐洲大戰以來多量南米に輸出したが之れが不景氣に遭つて商品が滯いても引取り手がないので其始末に困りウエアハウスの充滿で料金を引下げて引取らせしめると云ふ話まで聞いた位である、戰爭以來日本との貿易も盛になり隨分日本品も行つたが米國品よりも比較的好い、米國品が多量に行つてゐるのと品質が餘りよくないので評判が惡い、故に目下不景氣の爲め南米を取引が尠いが將來は悲觀するに及ばぬ、必ず貿易が恢復

▼評判が比較的好い、米國品が多量に行つてゐるのと品質が餘りよくないので評判が惡い、故に目下不景氣の爲め南米を取引が尠いが將來は悲觀するに及ばぬ、必ず貿易が恢復

◆コロラド州排日法案上程

▼州憲法修正後

コロラド州排日土地法案は州會上院委員會を通過したれば上院本會議に上る事となれり該案は左の州憲法修正を爲して後上程すべし

「現行法律又は條約により米國市民となる能はざる外國人の州内動産不動産取得相續所有移動すべき權利に對して州會に於て之を定むることを得」（傳電支主十一日特電）

◆沙港東洋間にも米船が競爭

……巨船二隻近く航海

加奈陀船も南下

▼沙港東洋間にも加奈陀船も南下

太平洋郵船が今回米國船舶局建造の客船五三五型二隻を桑港東洋間航路に從事せしめることは既報の如くであるが又北部間に在つても

▼沙港東洋間にもアドミラルラインが矢張り同型の巨船二隻を從事せしむることなつて目下盛んに廣告中である

此の船は

▲ウナナジシエ號（二万一千噸）四月九日沙港出帆

▲ケイストン・ステート號（同噸數）五月十四日出帆

▲皮切りに沙港、横濱、神戸、上海、香港、マニラ間の航海に

▼文明が遲れてゐるといつたが此言葉かもしても如何に南米がまだ未開國に屬してゐるかと判るがそれだけ又將來有望な國である譯だ」

▼文明が遲れてゐるとは何れも日本人を大歡迎して到る所好感情を以て迎へて呉れる一般に南米は未開地が多く交通機關も僅はらす文明の程度も低い或る人は南米東海岸は紐育より文明が五十年乃至百年遅くれて居るし又其西海岸は東海岸よりも更に五十年位

▼日本人を排斥すると云ふやうなこともない、他の諸國に比べ日本人は大歡迎し盛になるであらう、秘露は米國と特別關係あれば餘り對日感情も好い方ではない、併し別に

▼日本人を排斥すると云ふ

◆日本の野球は頗る有望

＝渡日職業野球團長ドイル歸米談

▽惡聲を放つた先着者に挑戰す

日本人を賞讃

＝次の冬再び渡日

昨秋渡日した米國職業野球團のキャプテンだつたデイーン・ドイル氏は一昨日桑港に歸着し先

▼快速力を以て聞えたるカナダアン・パシフィック・オーシャン汽船が晩香坡東洋間以外に南下し桑港羅府、晩香坡東洋間の航路又は桑港羅府と東洋間航路を開始すべしとあり、愈々太平洋海運界は競爭時代に入りたる譯なりと

●日本白金の輸出を禁止說

▼米國大打擊に

前後策が未決定中▲日本政府は此度突如白金の輸出禁止を發表せる旨一昨日桑港の貴金屬仲買商グレーシアー氏の事務所に入電有り此爲め米國に於ける白金相場は大いに

▼即騰する に至らんと觀測されつゝある由なるが日本は大戰以來露國の白金輸出閉止されてより世界有數の白金輸出國となり朝鮮其他東洋各地に產する白金を一手に納め米國への輸出額も年々僅少ならざるものなりしとグレーシアー氏の談に依れば米國に於ける白金の

▼產額は 加州に二三の小鑛に有るのみにて非常に尠く目下一オンス七十弗の高値を持つあり之が供給の大部分は日本より之が居たるものにて用途は裝飾、學術實驗用以外に飛行機發動機の一部に缺く可からざる必要金屬として認められ大戰中一時現在の二倍の

▼高値を生みたる事すら有り由なり今回日本の輸出禁止にて目下當局者は之が前後策を研究中なり

▼勝つた事から日本選手の技倆と人格を賞し『將來日本選手は米國選手と國際競技をする樣になると信ずるコーチが

▼惡聲を放つた先着者に挑戰す

▼完全し てゐない丈で他は何んでもよく演る」と云ひ更に曰く「彼等は皆一人五百弗位の金品を貯へ長の旅行を一文も費はすに過ごして來たのではなく『日本人に對しては唯賞讃の辭の外はない、我々は一番上等のホテルに泊り自働車で野球場に運ばれ何處の停車場に着いても代表委員の歡迎を受けた、米國のチャキス・リチャードたる櫛引弓人君は我々の野球會が天候其他の關係で惡かつたに

▲興行す る必要がなかつたからだ、僕は僕を惡主催者だと云ひ觸らした連中を正式の裁判に伸れ出し黑白を爭ふ積りである』と云つてから慶應との對球團の着いた時の方が大歡迎の意を表した大隈侯の御國でも歡

▼拘らず出來る丈の事を處に行つても屋つて呉れる廠が無い、一體各會社が行つた此人品物は無いと云つても差支へ減らしは決して冗員

▼陶汰ど云ひ得可きでなく

迎された、サンタルの前景氣は盛だつたから彼れはウント儲けて來る、日本人はサンテルに勝つ者は居るまいと

▼評判し てゐた」云々と

ドイル氏は歡日滯桑東行し更に新チームを組織して次の冬期二度目の渡日をする筈である

●卸商組合の集合

▼米貨問題を調査

日本食料雜貨卸商組合には昨夕六時より小川ホテルに於て過日來問題となり居れる卸商の小貨問題に關し同組合より抗議出じ如る筈にて同組合より抗議出でたる羅府小貨商に紹介中の處桑港の卸商にて小貨するものあるは事實にてわれど暫時其の名前だけは差控ふべしと回答なりたる由なり

●學兒分離案

委員會通過

▼グリン氏の提案

各地方の學務委員會に於て必要なりと認めたる場合は東洋人系兒童に對し分離學校を設立し得

▼歸任し た東濱桑港出張所

▼船客課の神田憲氏は語る『否や今迄の職業を此度の不景氣で失つた者許りでなく之から職に就かうとする學校卒業早々の青年達も頑張して存在する就職難の關門突破には尠からず困惑してゐる樣子でした、以前ならば失職者を輩出したり

▼就職難が襲來する程の不景氣に陷いると夫れに連れて物價も下落し幾分其處に調節されて息のつける處もあつたのですが今度許りは此に不景氣でも物價下落は聲のみで殆んど安くなつた品物は無いと云つても差支へないのです、彼等は職業に有りつく可く日夜東西に奔走しても各會社は過般の恐慌來で一齊に人員陶汰をした許りですから何

▼極度に 暴騰し收入の杜絶ねた失職者には住むに家さへ無いのです、彼等は職業に有りつく可く日夜東西に奔走しても各會社は過般の恐慌來で一齊に人員陶汰をした許りですから何

▼極度に 暴騰し收入の杜絶ねた失職者には住むに家さへ無いのです、彼等は職業に有りつく可く日夜東西に奔走しても各會社は過般の恐慌來で一齊に人員陶汰をした許りですから何

◆慘澹たる一

＝故國智識階級失職者の群れ＝

消極的な各會社の人減し

聲のみで下落せぬ諸物價

▽東奔西走に困憊する就職希望者△

今日本に於ける智識階級の失職無暗に恐慌來の聲に惱ねた會社幹部の消極的な經費節減方針は眼も當てられぬ慘澹たる狀態に在ります＝先頃歸國者の群れは

◆東漢で引受けた獨逸賠償船は

天洋丸よりも一層大きい

近く桑港東洋間航海

獨逸引渡船八隻中の最大船で千四百人の乗客収容力がある

……此報で東漢支店急に活氣づく……

獨逸より賠償船として受取りたる巨船キャプフキスター號は今回愈々東洋汽船にて引受けて難破船龍洋丸代船として桑港航路に

▲從事することに決定したるは本社東京特電（一面所載）の傳ふる所である、元來獨逸よりは我が戰艦喪失船十二萬八千噸の代償として八隻交附されたもので中アンギール號（貨物船八千四百廿六噸）は其公式受領後英國沿岸にて去る十二月一日遭難沈沒し其代船としてウエストランド號（六千四百九十噸）を

▲受領し八隻四萬七千八百九十三噸となつた、内第一船クライスト號（八千九百五十一九噸）は既に横濱に回航し目本郵船北米航路に從事することゝなつた、前記キャプフキスター號も引續いて回航したもので其他ヴエールヘルド號（貨物船四千四百六十噸）並にメクレンブルヒ號（同三千四百六十一噸）等都合

▲四隻は日本に回航し他四隻は英國で賣却されたのである、右に就き土井東漢支店長は語る『當支店にはまだ何等通知がないが今に通知があることと思ふ、キャプフキスター號が航海せば太平洋上恐らくは右に出づる巨船が他になからう、我が天洋、春洋よりも大きいのだから他は推して知るべしだ

▲此巨船は元獨逸の漢堡南米蒸船會社所有船で戰前漢堡ヴエノスアイレス間航海に從事してゐた、一九一一年漢堡ブローンで建造され戰時中は米國海軍の運送船に使用された總噸數が二万四千噸（天洋丸は二万二千噸）長さ五百六十呎、幅六十六呎、深さ卅一呎、速力廿節（經濟速力十八節）

▲天洋丸よりは何れも大きい目本郵船客課主任は語る『私は横濱で此船を實地見物しました、如何に大きな船でした、一月頃歐洲から英人船員乗組んで目本郵船が回航させたのでした、横須賀で修繕し目下横濱に碇泊中であるが船客は一等四百人、二等百人、準二等百人

▲二等が八百人合計千四百人収容力ある巨船だが客船だけに貨物は二千噸積載します、餘り大き過ぎて目本郵船で取扱へば一航海に卅五萬圓も損する勘定になるので手控へ客船取扱きい』云々、更に最近目本より歸桑した神田船客課主任は語る

▲晩香坡にて便船を待つ間目米關係に就て語つた、慶左の如し『目本の朝野は他迄目米親交を希望してゐるが世界の大邦たる目本が他からの指導を慎るは自然である加州人は此際之に目醒めなければならぬ私は華府に於て一米實業家として上院議員に

▲目本の事情を說くを得たが彼等は皆目米問題の圓滿解決に熱心であり概して對目態度に於て同情を示してゐた

▲日本の事情を說くを得たが彼等は皆目米問題の圓滿解決に熱心であり概して對目態度に於て同情を示してゐた

◆新第十一師團長

白川中將

第十師團は宇垣中將補鹽出征中第十一師團長齊藤季次郎中將逝去したる爲め左の師團長移動行はる

陸軍士官學校長　白川義則

補第十一師團長　宇垣一成

陸軍大學校長　補第十師團長

陸軍中將　星野庄三郎

補陸軍大學校長

……（本社東京特電昨夕六時着）……

▲一時之を海上ホテルか受けたならば『我政府は之に反對し彼地より彼等を

▲追放するであらうとは西伯利セメヨーノフ政府の代表者として外交通商の基礎を作る爲め渡米したロマノフ大使は潛桑中語る『我政府は未だ如何なる譲渡契約をもした事はなく過激派政府と關係ある者は如何なる者でも交渉せぬ』と同大使は華府に赴き使命を濟して倫敦巴里へ越くといふ

▼十五日桑港着

浦鹽より運送船にて桑港に

▲浦鹽より運送船にて我東洋汽船も日本一の巨船を持つ譯です』云々と得意然と語つた、太平洋郵船が巨船使用で悄氣氣味であつた東汽が此巨船回航で一時に蘇生つた感があつたのでした、之れが回航で始めて目本の爲め射殺されたる米海軍機關大尉ワーレン・エッチ・ラングド氏の遺骸は來る十五日米軍用

●大尉の遺骸

●華府議院の

對日態度

概して同情あり

▲日米協會特派委員グリー氏歸途語る▲東京の日米協會より推されて華府に出張し加州日本人問題に就て運動したゼネラル電氣會社東洋支配人米人チエー・アール・グリー氏は十七年間住馴れた目本

▲所有權を確保するものである勿論目本人は絶對排斥の如何なる政策にも憤慨するも目本人は加州よりも寧ろ朝鮮滿洲へ移住した方がよいと思ふが彼等も新條約に見て滿鮮へ振向くであらう』と

●勸薩克半嶋

譲渡み反對

ヴアンダリプが決行すれば大變だ

▼セ政府代表談

過激派政府と大取引をするとする米國のワシントン・ヴアンダリプ及び羅府資本家の一團體が若し彼等の叫ぶ如く勸薩克半島四十万平方哩を過激派政府より譲渡する條約をもした事はなく過激派政府と關係ある者は如何なる者でも交渉せぬ』と同大使は華府に赴き使命を濟して倫敦巴里へ越くといふ

▲浦鹽より運送船にて我東洋汽船も日本一の巨船を持つ譯です』云々と得意然と語つた、太平洋郵船が巨船使用で悄氣氣味であつた東汽が此巨船回航で一時に蘇生つた感があつた

●大尉の遺骸

役に立たぬ女の案内人

▽全米國各都市の消防署長の意見

▽十五日桑港着

▲浦鹽より運送船にて我東洋汽船も日本一の巨船を持つ譯です』云々と得意然と語つた、太平洋郵船が巨船使用で悄氣氣味であつた東汽が此巨船回航で一時に蘇生つた感があつた

●役に立たぬ

女の案内人

▽全米國各都市の消防署長の意見

▽十五日桑港着

▲浦鹽より運送船にて我東洋汽船も日本一の巨船を持つ譯です』云々と得意然と語つた、太平洋郵船が巨船使用で悄氣氣味であつた東汽が此巨船回航で一時に蘇生つた感があつた

●米國市場で

日本樂器

＝幅を利かす＝

名古屋駐在米國領事ホーレイ氏の報告

▲所有權を確保するものである勿論目本人は絶對排斥の如何なる政策にも憤慨するも目本人は加州よりも寧ろ朝鮮滿洲へ移住した方がよいと思ふが彼等も新條約に見て滿鮮へ振向くであらう』と

名古屋駐在米國領事ホーレイ氏の報告に依る大戰以來世界の樂器國になつた獨逸の株を目本が取つて変り

▼米國△のドンチャン騒ぎの音樂に用ひられるヴアイオリンは多く目本製の占ひる處となつた、一昨年目本から米國へ輸入されたヴアイオリンの價額は廿五万弗に達し目本のヴアイオリン輸出額の大割八分に及んでゐる、目本のヴアイオリン主産地は名古屋で其

▼元祖△は鈴木政吉氏が一八八八年珍奇なものとして外國樂器を輸入したのをモデルとして製造を開始し大戰開始の一九一四年には漸く二万四千弗ほどの製産額しかなかつたのが一九一九年には三つの工場を有し一千百人の職工を使用する迄に

▼發展△し五十三万弗丈けのヴアイオリンを輸出し昨年上半期には卅萬四千弗を製出したが『鈴木は獨逸が今後目本品だけの安價で輸出し得ない事目本品の品質の上等なのを以て外國市場に於ける目本のヴアイオリンの地位安全で特に米國の市場から

▼驅逐△されるゝ樣な事はないと信じてゐる、此信念の鍵は目本勞働賃金に據るもので鈴木工場の職工は一日廿二仙から一弗九十九仙の間にある』と米領事は報告した

◆貴族院の文相

彈劾案否決

▼僅少の差で

▲正金の態度を見ても此際故國銀行に救濟を望む多く期待し得ざる狀態に有るものゝ如く觀測せられ居れりと

▲種々協議されるる由なるが當地の住友銀行支店にては昨日本店に向ひ北加州跋米作者の現狀儘に於て救濟資金貸出を如何すべきや電報を以て問合せたるが何れ近日中何ぞか返電に接すべく期待され居り、されど度を見ても此

貴族院に文部大臣中橋德五郎氏彈劾案提出せられ激論の末百六十四票對百二十六票の僅少の差にて否決せらる

……（本社東京特電昨夕六時着）……

メントに於て開催され救濟資金の使途問題、本年度作付方針、市價問題に就て

▼困難な狀態にあり是等の犯罪の多數は州の境を一つ越ゆた他州で安全に生活してゐる樣だから之が防止法に就て大いに考慮を加へる事になつたと

▼大なる市の問題の一つなる捨子問題に就て協議した結果警察判別委員を選定し實行方法に就き次の週中に報告させる事になつた市や州の警察當局者は豫算の少い爲め捨子をした親を追窮捕縛する事が

▼追放するであらうとは

●協議された

捨子の防止

◇桑港の捨子救濟費

◇昨年は十二萬弗也

桑港市及び郡が捨子を救護する爲め支拂した費用は昨年だけで十二万弗に達したと云ふので市民委員は救護事業者等は昨日桑港警察

▼署長室に會合し最も重

●寫眞機泥棒一件

▲被害者は同胞ポスト街一五七〇久田運一氏は去る九日午前中外出する間に寢室へ殘し置きたる鞄入り寫眞機

▲犯人は逃げ去る樣だが賊は會鍵を以て忍び込みたるものゝ如し

▼又須市南エルドラド街四四日本寫眞館へ去る一月夜忍び入りたる泥棒はレンズ五枚及び外套價格約八百弗を盜み去れる件は當時所報の如くなるが昨日館主篠崎氏は彼の泥棒桑港に入り込み賍品を賣却せる形跡ありてポスト街一六三九瑞穂商會主盧澤氏を通じて捜索方を桑港警察署に願ひ出でたり

●ロルフ市長に一喝

▲學校を惡用したと

桑港市長ロルフ氏は水源地スプリングヴアレイ買入れを市民の投票に問ひ大運動をしたが結局失敗に歸した處公立學校保護協會長ヒゲヴイル氏は昨日市長に詰問狀を送り該運動の際市の學校に命令して買收賛成の運動を爲さしめたとは市規則に違反した大膽な行動だと一喝を喰はした相である

●花瓶から千三百弗

花屋さんの遺產

長らくミルヴアレイで忠實に働いてゐた花屋のジエームス・マーランと云ふ二ケ月許り前に病死したのであつた昨日隣家の知人二名が彼の室を制理した處積み重ねた書物の蔭から古び花瓶が現はれ中には千三百弗の現金が大切に仕舞ひ置かれてあれたといふ

●市有電車增給拒絶　桑港市有電車の運轉手車掌等は現在五弗の日給を六弗に增給せんことを要求して拒絶されたり

●本日は小雨　昨日氣象臺の豫報する所に依れば數日來の曇天は遂に本日は雨となられ、桑港及び北加地方は時々降雨の催しあるべしと

公人　私人

●奥田惣太郎（リビエラ旅業家今便春洋丸にて歸國す可く一昨夜出桑帝國ホテルへ投宿

●納宮孚中左衛門（廣府園兒島縣人實業家）同上昨朝出桑小川ホテルへ

●エビスホテルと日本行乘船勞一、二、三等共何時にても御申込に應じ走迎妻子御出迎にも特に親切丁寧に御世話致します室内湯水設備あります

645 Buchanan St., S. F. Calif.

桑港麹及び味噌の元祖

其名聲々たる藤本商會の醇味噌及び醇麹は安價多賣を以て愈々大々的に販賣を開始せり

Fujimoto Co. 1014 Stockton St., S.F.

「麹」の發展今回日本より招聘したる卅年の實驗を有する麹專門の技師により製造されたる麹は天下無比の詩りを以て愈々大々的に販賣を開始せり

Kagiri Koji Co. 1534 Post St., S. F.

鮮魚、精肉

和洋食料雜貨一切

細工藩鉾御注文に應じ小賣可候

桑港ポスト街一七四七

電話フオルモア四二九四

桑港魚市場

シンガーミシン

一般に該鍵道具一切

桑港アキナナ街二六三

電話フオルモアナ二六三

みとま

英語教授

親愛なる目本人諸君の成功は實用的英語習得にあり妾は「キー」著者且十數年經驗あり懇切教授す

Miss C. RYAN, Tel. West 6125

3103 Clay St., S. F. (Near Baker)

桑港ポスト街一七四七

電話ウエスト一六三

森山寫眞館

桑港ポスト街一八一〇小幡繁子

カナヤマ　ローラ

グリー街一五一

小幡裁縫學校

入學隨時

グリー街一四〇八ミセスカイル

英語個人教授

特製ハイカラ饅頭

豆菓類一式

桑港ラグナ街一六〇八

菓子製造卸小賣商榮玉堂

田村桂庵隣

（電話架設中）

開業賣出

御菓子一式

桑港ポスト街一五〇九

電話ウエスト一六三

谷靴店

販賣部

修繕部

大勉強

斬新流行

すき燒

ブキャナン街一七〇九

電話ウエスト一六三

博多屋

桑港フイルモア街一四三七

電話ウエスト一三一七七

櫻庭療院

民刑事訴訟法律事務一切

加州日本人勞働協會

法務部

主任　エル・エル・ビー　兩角傳

桑港ラグナ街一六一三

電話ウエスト二三七七

移轉廣告

今般左記に移轉仕り筋骨調整マッサージ及最新式電氣風呂開業仕候

桑港ウエブスター街一五四二

電話フオルモア五七七三

櫻庭療院

●引延

●進呈

桑港フイルモア街一四三七

電話ウエスト八六五〇

吉里寫眞館

改稱廣告

桑港フイルモア街一六三三

電話ウエスト三六〇

原田寫眞館

（ストックトン街の西）

一從前より浦川兄弟靴商會を以て四方諸賢の御愛顧を悉し今日の隆盛なる域に達し候段深く奉感銘候

就ては此度大橋靴商會と名義を變更し從前の通り業務擴張し層一層の勉强願客の需に應じ可申候間不相變倍舊の御眷顧を亟られんことを偏に奉懇願候

一此度商號の改稱御披露の紀念に來る三月七日より二十六日迄三週間破天荒の大割引仕候間隆讃御來店の程奉仰上候

敬白

桑港ポスト街一七一七

（舊浦川兄弟靴商會）事

大橋靴商會

電話ウエスト一三一九

B

菱餅よもぎ餅櫻餅雛菓子

御菓子司勉强堂

桑港グリー街一五三三

電話ウエスト七五三七

一日十仙たやすく買へます

桑港アキナナ街一七一七

電話ウエスト四〇三七

太田永太郎

シンガーミシン特價販賣

弊商會主鈴木仁兵衛儀中旬出發しました體力、腦力、精力增進に御好評の此パワー錠の如き良藥を見付けたら何病藥に拘らず輸入販賣の計畫であります

ビヒスペパワー錠

適應症は一般神經衰弱、頭痛、目暈、耳鳴、熟睡不能、記憶力缺乏、不愉快、悲觀、機能障害一切、精力薄弱、婦人ヒステリー等にて五十錠入印紙料共一瓶五弗二十仙、二瓶九弗九十仙、三瓶十四弗十仙、郵送無料重きは三四瓶、輕きは一二瓶にて大抵全治す

日本人部キーセント　鈴木商會

The Suzuki Co. 1532 Post St., San Francisco, Cal.

特約店　桑港入正藥舗、大阪藥店、須市錦帶堂、布市スター藥舗、櫻府岡春堂羅府イーグル藥舗天賞堂、沙市メーン藥舗

病者の爲

信賴の出來る醫師、血液檢査所及びX光線部の紹介と通譯をなし病者の相談に應ず

桑港ラグナ街一四三二　救世軍醫師部

電話ウエスト六〇八二

同（ムロック街五二五　電話フイルモア六一八

タムラ藥舗

TAMURA YAKUHO, 1708 Buchanan St., S. F. Cal.

聲明書は御申越次第送上ます

洋洋貴藥並に男女用品一切

日本人投資會社

銀行預金に優る一割の公債利

▲日本政府發行國債債券五分利、國庫債券千圓券利子年一割、五分利戰債券千圓券利子年一割、元利支拂全國銀行及郵便局預金に尤も便利

▲日本政府發行物資公債、五分利物資債券千圓券利子年一割、五分利物資債券千圓券利子年一割、元利支拂全國銀行及郵便局預金に尤も便利

▲日本政府發行物資公債、百フランク券利子年一割以上、元利支拂日本銀行及名支店出張所歸國者に尤も便利

▲日本英貸公債第一第二回分第二回四分百弗券特に御便宜ある計畫債券は總て郵送

第一ナショナル銀行の保管證券附

地方出張員　野村種次

公債

（額段及發債書送呈）

Japanese Investing Co.

J. H. Suito

309 First National Bank Bldg.

P. O. Box 74 Berkeley, Calif.

Tel. Berkeley, 2377

桑港ポスト街一八二四　電話ウエスト八三九六

部谷自轉車商會

大河原法律事務所

夜間電話

アルフイルク八四八一

T. Okawara, Hearst Building San Francisco, Tel. Sutter 3127

日本御士產理想適品は自轉車が第一です

最新式自轉車並にモータサイクルを大安價に差上げます

目下中古の各種持合せあり御出桑の節は是非御來店を願ます

桑港ポスト街一七一七　電話ウエスト一六三

電話ウエスト一六三

櫻府岡春堂羅府イーグル藥舗天賞堂

沙市メーン藥舗

日本人部キーセント　鈴木商會

The Suzuki Co. 1532 Post St., San Francisco, Cal.

特約店　桑港入正藥舗、大阪藥店、須市錦帶堂、布市スター藥舗

櫻府岡春堂羅府イーグル藥舗天賞堂　沙市メーン藥舗

桑港ポスト街一七一七　電話ウエスト一六三

電話ウエスト一六三

櫻府岡春堂羅府イーグル藥舗天賞堂

女優の娘 (六十八)

五黄星作

相手が屈しかければ、益々昂にかゝつて、相手を壓伏しやうとするのが日本人の病癖だ。自分も其病癖から脱れるとは出來なかつた。由良子が憐みを乞へば請ふ程、自分は皮肉に出るのであつた。

由良子は最早絶望したやうだ。顏の色は眞青で、唇にも血の氣はなく、五體はぶる〳〵と慄へてゐた。

『もういふとはそれだけなんだね』

自分は最後の刺刀を刺うとした。

由良子は尙は頭を振つた。

『いゝね、何を仰しやられても總てが貴郎の誤解から出てるのですから——一切が明かになつた時、貴郎は今晩私に仰しやつた、慘酷な言なり、舉動なりを、後悔遊ばすでせう』

『は、は、は、早く後悔して見たいもんだ、まあ精々若い男と巫山戯るが宜いさ今夜限り僕はお前が彼男と親密にすることに就て、故障を云ふ權利がなくなつたのだから』

『それだけは誤解です、彼男は私の愛人でもなければ友人でもない……』

『では彼男の名は？』

『私は存じません、彼方も云ひません、全く今夜初めて會つた人なのですから……』

『男の名も知らぬ？、では、高松君と云ふのは』

『うれは一種の符號です』

『は、は、は、姓名といふのは總て人間の符號で、はないだらうか——それでお前は彼所で偶然と話しかけられたといふのか』

『いゝわ、鶯溪の停車場で、約束に依つて會つたのです』

『約束に依つて？、それで其男の名も知らぬといふのか』

『はい、でも私共の會合は、都て或る第三者の指圖に依つて爲されるのですから——然しられは決して、愛の分子を含んで居なかつた事は神に誓ひます。神に——』

『では何の目的で？』

由良子は醉に頭を振つた。

『それは未だ、他言する時期に達しません、從つて茲で申上ることは出來ません』

『は、は、は、僕の豫想通りだ。良人も犧牲にして顧みぬ筈だ』

『然う皮肉に仰しやられると、言の繼穂が御座いません——然う云つた樣な譯で、然うした類の顏の、云ふに云はれぬ秘密は、私の周圍を取卷いて居るので御座います。つまり私は結婚前にも、亦た結婚してからも、私達の幸福の爲めに、然うした秘密を拂ひ退けやうと、一生懸命に努力して居るのです。ですから先程の樣に、貴郎が慘酷な事を仰しやつたも、其結果私達が離婚れることになつたりしたら、而して其後になつて總てが明白になりましたら、最後に一番酷く後悔なさるのは、一體何方なので御座いませう』

由良子の語を碎いて云へば、一切が明白になつた時、最も悔悟するのは貴郎だと云はぬばかりだ。自分はそれには答へず、無言で室中を歩き廻つた。而して幾度となく由良子の言に就て考へたが、併し遂に決心を翻へす迄には往かなかつた。

『悔悟？、悔悟？、結構だ、早く悔悟する時が來て欲しいもんだ』斯う云つた時、柿助が自動車の用意の出來た事を知らせて來た。

日本の女工

機織工女の手記 (十七)

梅本龍子

たかみさんは菱菱帽子の內職をして居ました。私もそれを手傳つて日を過しました、大變に親切に可愛がられて、私は神樣にでも助けられたやうに思ひました。地獄で佛とはこの事だと思ひました。

二ケ月ほど其家に居ました。或る日其家の主人が仕事から歸つて來て、この子をうちの子にしてやりたいがね、年が少し大き過ぎるね、十七を見ねばなれど、十四五ぐらいだね、こんなにして置いてもしや警察にでも知れると大變だから、どもかく機屋へ手紙を出さなければと云つて、私に所を聞いてハガキを出しました、三日ほどすると機屋の養子が來ました、まあほんとにお世話樣でした、まあこんな所まで來てたのか、たんさがしたがこつちの方とは氣がつかなかつた、どもかく一度かへして下さい、其上どうなり相談致しますからと云うて、お金を五圓出して私をつれて歸らうとしました。その時折惡しく其家の主人が留守でした、たかみさんは主人の歸る迄待つて呉れと言ひましたが、うれを聞かず、無理やりに私をつれ出さうとしましたが私はうれまで障子の陰に泣き伏して居て養子の顏など見ませんでした。たかみさんは私に仕方がないからね、主人の許へ歸つて、もう少し働けば國へ歸れるのだしするから歸れと、泣きながら自分の子のやうに云つて呉れました。私は私は父母の許を出る時よりもこの家から歸るのがどんなに辛らかつたでせう。泣いて〳〵眼をはらしました。

主人の許に歸つてるん〳〵打たれた時、私は齒をくひしばつて泣きました、そこへ娘が來て、あつちに行かうと云つて工場に連れて行つて呉れました。私は皆に顏を見られるのが恥しくてなりませんでした。

その年も小さな工女が十日ほど間を置いて二人死にました、うちの中の一人は私の好きな同じ故郷の車夫の子の冬ちやんでした。また間もなくそんな病人が出來た時、警察の方へそれも知れたのでせう、ある日巡査さんがお醫者さんを連れて來て一同の者を診察させたり、飯の檢査をしたり、たかすはどんな物をたべてゐるか、こまかく調べました。皆さすが、こまかく調べました。父母へ手紙を出させるやうにもして下さいました。

入院隨意
產婦人科、外科、眼科
內科小兒科、皮梅科
耳鼻咽喉科
日本病院
ドクトル中村竹之助
ドクトル大高善次郎
桑港パイン街一八一一
電話フィルモア二〇〇四

帝國病院
1629 Post St., S. F.
入院隨意
加州公認
主任ドクトル伊津野房一郎
桑港ポスト街一六二九
電話ウエスト七二六二

◉內科、外科
◉產科、婦人科
◉小兒科
其他一般注射治療
桑港ウエブスター街一五四八
(ポスト街グリーンの間)
公認ドクトル藤森醫院
メデシネ藤森直和
電話フィルモア五六四

齒より來る故障は體內諸疾病に直接原因となるはX光線應用に依り醫學社會の實證なり
公認大久保齒科醫院
平日午前九時より午後五時迄
405 Sutter St. Cor. Stockton
Mc Laud Bldg. Room 304
Tel. Sutter 7405

桑港市公認齒科醫師
(いろは順)
桑港グリーン街一五二六 井戸本保之助
桑港ポスト街一七六 林德太郎
桑港ポスト街一五三〇 田中敏太郎
桑港ポスト街一六六二 檜垣益一
桑港ポスト街一六六八 山本辰雄
桑港ブキナナン街一二六六 谷田部保
桑港ポスト街一六四五 藤田省三
桑港ポスト街一七三九 小川榮一
桑港ポスト街一七四〇 木暮篤太郎
桑港ポスト街一五六八 川榮一

加州歯醫師會
市俄古市唯一の專門學校御出迎申可く候
丁寧親切低廉
御一報次第御出迎申可く候
電話ドグラス五九五九
2951 Ellis Ave. Chicago, Ill.
及川旅館

入院隨意
產婦人科、外科、眼科
內科小兒科、皮梅科
耳鼻咽喉科
日本病院
ドクトル中村竹之助
ドクトル大高善次郎
桑港パイン街一八一一
電話フィルモア二〇〇四

公認林產院
桑港ポスト街一五二八
電話ウエスト五七六八
公認產婆林イエ
姙產婦取容隨時往診
公認產婆家木英子
(桑港病院)
桑港ブッシュ街一八〇八
電話フィルモア一九八六

桑港ブキナナン街一五五二
加州公認北河醫院
スタンフォード醫科大學出身
ドクトル・オブ・メデシン
北河慶次郎
電話フィルモア五二八八

桑港ブッシュ街一九〇七
內務省免許
許產婆
倉本ひな
電話フィルモア一九〇四

桑港櫻府電氣鐵道
桑港埠頭キールートより櫻府行
櫻府より桑港行毎二時間發車す
San Francisco-Sacramento R. R
Key Route Ferry. Phone Sutter 2339

HOTEL FUJI
423 Maynard Ave.
Seattle Wash.
妻君御親族御朋遊御呼寄の際は前以て御通知被下度
へば上陸に關し必要なる事項早速御返事可申上候
シャトル市
パーナード街
四二三
燦瓦遊戯館二樓タコマ及キャマ旅館各二百室最新設

羅府
ロスアンゼルス市東一街一二九年(電話一五一五九)
日本行各滊船切符代理店
各室、湯水、スチイーム、ヒーター等最新設備完全
イーグルホテル

羅府
ロスアンゼルス市東第二街三〇五(電話一二八六七)
食室、自動昇降機、スチイム、ヒーター等最新設備完全
Hotel New York 305 E. 2nd St., L. A. 館主岡崎敬之介
ホテルニューヨーク

桑港スタクトン街一〇一九
藤井旅館

英語教授
初學者、新渡航者、婦人及年少者の爲に懇切教授す
二八一一番
寺澤教館

公認川口產院
姙產婦取容
內務省免許、加州公認產婆
電話フィルモア二二一〇
四九四七
桑港ブキナナン街一七一四
川口藤子

帝大產婆科卒業
公認產婆
桑港ブッシュ街一九二三
電話ウエスト八九三五
飯田テイ子

公認產婆
桑港グリー街一四二八
電話ウエスト七四一八
眞鍋產院

公認產婆
桑港ポスト街一六二四
電話フィルモア一七六一
村山なみゑ

◉皮膚病專門男女症難全治保證
診察は總て日本文にて宜敷候
通診時間自午前十時至午後九時
醫學博士
桑港グラント街五〇二
Dr. LOU YIT-CHO
劉日初

小川藥舗
1708 Buchanan St., S. F. Cal.
◉小川製婦人病藥 內用 百錠入 三弗 外用 四十回分 二弗
めぐり前後の下腹病、こしけ等婦人病一切の良藥
◉肥える藥 一ケ月分 二弗
オーヤー眼肚病は血の少ない人、やせる人、氣力疲力の衰へた人等に最もきくめある良藥なり
◉ドクタヤック錠 百錠入五弗 二瓶八弗
此藥は病れし神經腦體の衰弱を補し精力を增す强壯劑に不能無精の婦人等に用ゐて効果多し
◉オシメカバー 長上米國製 一弗
◉最上湯たんぽ 保險附 四弗
電話ウエスト九五七 藥劑師 小川龜宣

高尾鶴松
桑港スタクトン街七五八 電話カーネー二四七六

公認調劑
日本ドラグストア
桑港ポスト街一六九〇 電ウエスト一八六
NIPPON DRUG CO.
1690 Post St., San Francisco.

藥局

郵送無料
大阪藥店
公認調劑
◉滋養强壯 グリコナル 佐伯博士發見 定價一弗五十仙
◉强精錠 百錠入一瓶五弗 二瓶九弗三瓶十二弗
◉有効確實通經丸 一劑五弗
◉有効確實つわり錠 米國製劑 三週分 二弗
◉胃腸新藥タラコン湯 附井技師先生發見 定價一弗二十錢
▲アフヂヤック錠 五、〇〇
▲復方ヨヒンビン錠 五、〇〇
▲朝鮮人參錠 三、〇〇
▲ビクトリヤ月經帶 七五
桑港ポスト街一五九四 電話ウエスト三四七四
OSAKA DRUG CO. 1594 Post St., S. F. Calif.

謹告

千九百十八年戰時聯隊區法例に觸れし以來合衆國法廷に於て爭訴し來りしも遂に敗訴に終り一般社會の誤解を招き一方ならぬ諸彥の御配慮を煩はし申候段小生の不德の致せし處慚愧に不堪候元より無實の汚名最後まで守戰の覺悟にて先般事件顚末を大統領ウイルソン閣下に私訴致し置き候處詳細再調査の結果私訴の趣き聞き届け一切不問に附すとの吉報に接し候苟も大統領ウイルソン閣下より僅かに一個人たる小生に對し直接自署の親書を賜はり候事小生一代破格の光榮にて茲に愈々晴天白日の身と相成り得たる段之れ偏に諸彥の同情と篤き御後援に與つて力有る事を感謝至極に存じ候付ては聊か御高恩に報ゆる爲め館內大革新を加へ誠意益々大勉強以て萬事遺憾なく御便宜を圖り御用命に應じ度候條何卒倍舊御愛顧御引立の程伏して願上候先は事件成行御謹告旁々失禮をも顧みず紙上を以て御禮申上候 謹言

一九二〇年三月 日

加州館
中野作太郎
桑港スタクトン街一〇一九

◉最新流行
珍柄到着

出來合品は引き續き大割引の安價を附し、御誂物は精々勉強仕り御用命に應じ候間不相變御愛顧の程伏して奉願上候

男女洋服卸小賣
雜貨輸出入
ふく組本店
本店 桑港ポスト街一八六三 電話ウエスト三四四
支店 同サウスパーク一四〇 同 サター三六一八
同 横濱市本町五丁目九〇番地

◆接木選擇と無花果（一）

＝果樹の選擇改良と接穂の關係
無花果は固定特徴を遺傳せず＝
無花果新種と其遺傳性▲

▼無花果新種　果樹の繁殖法は大多數已に結實する木の枝又は芽を取つて接木又は挿木とする、變種でも果樹苗木育成上枝と芽の選擇は甚だ重要であるとて加州農事試驗場などでは特にオレンジ芽接ぎ用の芽の選擇と親木の關係について研究して其一部分の成績は已に發表せられたが、其結果は芽をば必ず性質の好い多産の木から選べと云ふのである、他の果樹即ち桃、アップリカット、梨、プルーン、杏等も同じ傾向があるから是又接木にする木と枝の選擇を嚴重にし年々改良して行く効果を認められ苗木業者の組合では

▼接木用　果樹を特別に育て果樹一本毎に品質の善惡收量の多寡の記錄を取り優良と認めらるゝ木からのみ接木用の枝とらるゝ木からのみ接木用の枝と芽を採用する計畫を立てゝ居る却說無花果の挿木苗木仕立てに要する枝の選擇は如何にすべきか他の果樹と同じ方法を採用すべきか否かについて專門研究家の意見を紹介する

▼無花果　中加州に昔から栽培せらるゝ黑色ミッション種について此人の信ずる所によると此種は未だ特徴が固定して居らないと思はるゝから加州内何所に生長する木から繁殖用枝を採集しても大して差異を認めない勿論無花果を果實として比較い勿論無花果を果實として比較して見ると品質に大差あるが然し

▼栽培地　方の無候土壤に依つて異るので苗木の受けた遺傳性から來るのではない、勿論黑ミッション種が大體の特徴を遺傳するは勿論であるが其種内で實が大きいとか甘味が多いとか云ふ特徴を具へて親木から苗木にと連綿として繼續して行かぬ如くと思はぬる、此現象は單に黑ミッション種のみならず

▼アドリア　チック種も同樣である次に無花果園内の果樹各個について調査して見ると生産量に於いて大差がないオレンジ畑やレモン畑には多數の果實を生産する木と然らざる木と非常の差を見るが普通であつて耕作者は常に注意して不生産的な木には優良なオレンジ又はレモンの木から

▼芽を集　めて新に芽接ぎを實施する習慣となつて居る之に反し無花果園には土壤と耕耘法が普通で病虫害にも罹らず水分の供給が充分であるとすれば果實の生らない無花果樹は殆んど無い

●白人間に創設の新養鷄會社

株主に卵安價販賣

桑港白人間に珍らしい株式會社が組織せられた名稱は共同養鷄會社と云ふ目的は桑港附近三十哩以内の田舍に地を卜し養鷄事業に從事し生産鷄卵を株主に原價にて分配するにある資本金六万弗

▲一株五弗　とし一万二千株を公衆に賣り出す事となつて居るが一家族の持株は五株迄と制限を附せられ如而して其五株も家族が五人即ち一人に對して一株の割合でなければならぬから二人や三人の家族では五株持つを許されない一株の所有者は一週一打づつ會社生産の新鮮な卵を

▲購求する　權利が與へられる二株持つてる人は二打要求する資格があるし株數が增せば增に準じて多くの卵が買はれる六萬弗の資本で三十英加の土地を買ひ入れ諸種の設備を科學的に完成し遂には平生二萬の產卵鷄を飼養し卵は毎日桑港に運搬し產卵してから二十四時間以内に株主の勝手元に配達せられる目的が株主の共同事業として

▲毎日新鮮　なる卵を生產なる卵を生產して分配するにあるから利益の配當がない利益が擧がるとすればそれを飼養費の方に廻して卵を安く賣る計畫である主唱者の云ふ所に依ると此會社で賣る卵の價は市場相場より少なくとも十仙位は常に安價にて分配し得ると云ふ

◆加州問題は感情問題

紐育タイムス社支配人　オ・ダニエル氏の意見

（下）　紐育市　浪之助

私は敢へて徹頭徹尾日本人諸君に向つてアメリカナイズを云ふが如き議論をする者ではない日本は二千有餘年の歷史を持たる國なる故に風俗習慣にも吾れのコーン百四十四萬九千ブッシェル四割八分オーツ八十一万四千ブッシェル一割五分大麥五百四十六萬二千五百ブッシェル一割九分が未だ販賣せられずに農家の手元にある昨年の同日には小麥收量の七分コーン一割一ツ相互感情の衝突を避ける樣にすべきである余の云ふのは決して蓄加運動に習慣に依つて判斷する外は無いのであると議論は大分高潮して來た余は日本及日本人に對する侮蔑を拜聽致したが加州問題に對する加州人の行爲日本人の取る可き方法或との御質問に答下に加州人のなせる土地法案は非人道である然るに貴下御見解を以て非人道的であると云はれる法案と同一の法案はテキサス州にも起たる事を貴問したるに同氏はテキサス州は所謂殖民地同樣にて云はゞフロンテヤであるから今日排日を叫ぶかと思へば一ケ月後には親善を稱ふるといふ子供は少しの事に感情を高ぶるのと同樣で大した問題ではない要するに加州人の在住の諸君は忍耐に忍耐を加へ

桑港市場＝農產物

三月十一日……金曜日

セロリ多量

▲アスパラ不變
▲アスパラガス　本日河下地方よりアスパラガス二百八十七箱出荷あり前日と大差なし市價も動かず

▲帝國平原アスパラ　本日帝國平原よりアスパラガス三クレーツ始めて出荷あり河下蔵に比較して青く細く品質惡る河下產最低値十五仙よりも劣り昨今各地よりセロリの出荷

▲セロリ出荷　潤東及びマンテンビューよりもフレッシも出荷あり一クレート二弗半より二弗七十五仙上等三弗臺を出

▲バター下落　最近バターの下落引續き本日二仙方暴落し

▲鷄卵も下落　一時上向の四十一仙となる

▲出荷分量　本日オレンジ四貨車、ポテト三貨車、アップル二貨車レタス一貨車出荷あり

▲東部產甘藷　東部產のナンシーホール・スキート・ポテト多量出荷あり市價强から老價も動かず

▲ピース上向　潤東產ピース本日大袋出荷ありたるが取引盛にて十五仙より十六仙臺を唱へたり

▲アップル市況　先週中桑港冷藏庫より出荷したアップルは一萬二千五百廿三箱あり昨朝迄の貯藏のものは十八萬九千百二十二箱あり、昨年同期には廿四万四千百六十四箱ありたる

▲バター下落　最近バターは二弗半より二弗七十五仙迄の下落引續き本日二仙方暴落し

▲鷄卵も下落　一時上向の四十一仙となる

▲果實類
▲蜜柑　オレンヂ半箱二弗半より三弗七十五仙
▲ベーキ　一箱三弗より三弗半ウインニーニイルス三弗半十仙より四弗
▲オレンヂ　箱入半ブッシェル二弗半より三弗
▲レモン　二弗より二弗五十仙上等三弗半より三弗半
▲グレープフルーツ　半箱二弗半より三弗半上等二弗半より三弗半
▲アップル　一箱二弗より二弗廿五仙より二弗半ニューヨーク二弗半ニューヨーク二弗半ヨーク二弗半ヨーク二弗半

ロスアンゼルス (十日)

●加州の煽動による テキサス排日内情

▲岸八太郎氏來羅談

先きにテキサス州ハーリンゲン市に於て當地より移住せる大熊兄弟に對し廿四時間内に立退きの强要をなし續いて在來同地にありたる人々も遂に羅府に引上げ又た同地に移住せんと計畫せる人々もこれを中止するに至りたる由は當時報道し且つ加州の排日の原因に關して本紙は逸早く加州より日本人を去らしめざるの一方策として斯くも猛烈なる運動を起せるものなら宰や報じ置きたるが果せるなか同新耕地紹介者なる岸八太郎氏の九日來羅語る處の排日内情を聞くに先きに本紙の報せしものと符合する點多々ありたるが今左に同氏の調査せる内容を報せん

▲全く加州の煽動 テキサス州の知名の士の机上には加州各方面より送り來れる排日宣傳のパンフレットを始め私信等の山と積まれたるのみならず加州より排日運動員來り各地に遊説を試みたるものにして排日パンフレットは排日派よりのものと又た政治家より發送されたるものとは別に不審を抱くに至らざるも驚くべきは

▲野菜仲買と地主等より送り來りたる排日宣傳パンフレットの澤山あり如なることこれ等日本農家と深き關係あり當然親日家ならざるべからざるに何故排日宣傳に努めたるかと尚ほ調査の歩を進むなるに彼等は加州新外人土地法により日本人農家の他州に移る時は忽ち加州内の仲買商は營業を失ふと共に又た地主は日本人の後繼者なくレントの收入なきにより茲に始めて加州より日本人を出さざる樣たるものにして南加に廣大なる土地を有するエスピー鉄道會社の重役は頗る親日家として有名なるも支配人の名義を以て猛烈に排日宣傳をなし其他シカゴの代表者も兩州同業者聯絡の美名の許に同樣排日運動をなし一方在郷軍人團の排日運動を極めたる在郷軍人團の排日運動も恐怖の念を抱くに至るとは前述の如き眞相の暴露されに至り目下同團に對する非難の聲も益々昂まりつゝあり云々

●南加各日會幹事會

▲十日午前十時より開會

南加中央日本人會聯絡各地日本人會幹事會は十日午前十一時より中央日本人會々議室に於て開會出席者十六名にして最初茅野會長開會の辭を述べ夫れより議長選挙に移り羅府日本人會書記長葛西治三郎氏を議長に指名し次に書記に葛西氏を議長に推しサングーブル平原氏を副議長に推しサングーブル平原氏より會幹事安西清春氏を書記とし議事に入り

▲日米親善費の一人一弗寄附の件につき午前中熟議せる由なるが午後二時より引續き開會せり尚ほ出席者の氏名は左の如し

中央日本人會聯絡會▲ロスアンゼルス▲葛西治三郎▲ロンビー吉▲善次▲サンゲーブル平原安西清春▲サンデー野恒造▲ゲガロー▲松浦清▲サンピードロ内田節三▲ヒコ▲松本附彦▲喜美男▲サンバナテ白濱孫作▲ヨンテベロ安▲バサテナ白濱孫作▲ヨンテベロ安▲喜美男▲サンバナテ

サクラメント（十一日）

新宮土地事件 所管替申請

▲ヨーロー郡裁判所に去る千九百十九年四月十三日サター郡在住農業宮新宮重助氏が同氏の女兒籌厚江及び清子兩名の名義にて同地フランクリン・コーナーに在る土地二十英加をジー・エル・ドーグラス夫妻より買収する事實は千九百十三年制定土地法に違犯せるものなりとて起訴せられ該事件は爾來今日迄未解決の儘なりしが來る三月十九日を以てウエッブ檢事總長の許可を受くる爲め該事件をサター郡よりヨーロー郡に移し同郡裁判所の審理を仰ぐ可く被告側辯護士たる櫻府スクワーブ氏より右處理方の裁判所の所管換を原裁判所に向け本日申請せり

花田夜警の手柄

本日午後一時頃花田夜警がエル街と第五街角に在り見張中二名の米人来り二名のホールドアップに襲はれ金四弗を奪はれ又頬部を殴打されたりと告げたるより同夜警は現場たるエム街と第四街角に急行せるに怪漢二名を認めたるよりピストルを發射せるに怪漢は驚き逃走したればエル街の第三第四街の中程迄急逐せる折柄之を聞き附けポリス二名自動車にて馳附け一名の怪漢を捕縛したるが花田夜警は右の報力に對しチーフより櫻府スペシアルナイト・ワッチのポストを授與されたりと

ワッ氏同胞視察　ワーターハウス氏は本日午前十時櫻府日會を訪問し同胞狀態視察の希望を述べたるを以て唐川幹事の案内にて不老林に赴き更に同地石垣日會長及び岩鶴幹事の案内にて同胞各農家を訪問又同胞學童の多數を收容せる同地公立學校を視察する所あり正午櫻料亭千代志に於て午後二時十五分發のエス・プレー線にて羅府に向け出發せるが同氏來櫻は他に州會及び知人の供養會に出席するの用向きなりとて帶び居たりと尚ワーターハウス氏は同胞農家の生活狀態改善に就ては一年リースは頗る無理なる感ありと述べたり

矢田總領事來櫻　總領事矢田七太郎氏は在米日會神崎書記長及び大谷氏附添ひ本日午後五時頃來櫻料亭千代志に於て櫻府日會主催晩餐會に臨み宴終つて寸刻歓談に費し同八時發の電車にてチーコに向け出發せり當夜の晩餐會には津田會長佐藤副會長唐川幹事田中及び當支甚西村其他數氏出席せり

●總領事明日行程　矢田總領事は別項記載の如く昨日午後八時チーコに向け出發本夜は同地一泊今十一日は午前十一時半同地歯養午後一時半コルサ着同三時コルサ出發メリスビルに至り午後五時頃地出發再び櫻府に歸る後五時頃地出發再び櫻府に歸る同夜は夕食に臨み終つて櫻府學園に於て講演を試み同夜はトラベラース・ホテルに投宿の豫定

●歸國願々　櫻府市内山口縣在原氏ミセスデンバと佐賀縣人塚原勝藏氏はミールス熊本縣人田上榮吉氏妻女同伴▲市内熊本縣人吉田直作氏▲市内青木蓄音機主人青木儀市氏以上三月十六日桑港出帆春洋丸にて一時歸國▲市内洋食店久保田嘉市氏妻女同伴三月三十日出帆チャイナ號にて一時歸國

●種痘　當市唐津ドクトル養子氏歯科醫種痘及び健康診斷を行ふ由

●土方町田氏送別會　十日午後七時半より櫻府聖書學院に於て今般家事上の都合にて一時歸國する土方牧師及び町田夫人の送別會を催ほしたり

●不老林美以教會　不老林以美教會へ左記諸氏より寄附あり井上恵二八郎氏・家原勝太郎・同谷五弗

●自炊野遊會　市内よろつや岡田岩上商會・福田大勝堂・佐々木田舎商店・清野保險業・竹森諸氏の第三第四回の中程迄急逐せる折柄之を聞き附けポリス二名自動車にて馳附け一名の怪漢を捕縛したるが花田夜警は右の報力に對しチーフより櫻府スペシアルナイト・ワッチのポストを授與されたりと

●不老林美以教會　不老林以美教會へ左記諸氏より寄附あり村上恵二八郎・家原勝太郎・同谷五弗

●種痘　來る十二日（土曜日）午後二時より櫻府第三小學校に於て種痘及び健康診斷を行ふ由

●櫻府日會　櫻府日會主催の野遊會は來る十三日（日曜）午前十時より櫻府第三小學校に於て開催の筈

●横浜市會　横浜市會は去る十日の市會に於て市内洋食店久保田嘉市氏妻女同伴三月三十日出帆チャイナ號にて一時歸國

スタクトン（十日）

情婦と娘を殺し自殺し同胞

▲岡山縣人山内民藏▲原因は多分嫉妬か▲訪問の日本人は山内民藏氏の妻子を殺害し自殺したるものと認む

▲アキャンボに十餘年間在住しバアワー氏の葡萄園を經營し居たる岡山縣人山内民藏（三）は昨夜其キャンプに於て白人寡婦ローネー（四五）と呼ぶ情婦及びアデリンとして二人の間に出來た五歳になる女の兒とをピストルにて頸部を打貫き三人共即死せる慘▲大要は昨紙第二面所報の如くなるが尚は其後聞を摘記すれば

▲二人は昨日　十二時の電車にて須市に向ひたる後一向飲酒せる模樣無きより混血女兒アデリンの義兄に當るホルスタインと云ふ少年が今朝八時頃心配しながら山内のキャンプに至りたるに母と妹はベッドの上に息絶へて横たはり山内はフローアの上に右手にピストルを持ちて仰上樣に倒れ居るを發見し直に▲警察に電話を以て通知したれば警官、探偵、檢屍官等時を移さず驅付けたるがローネ一は胸部に二發娘は胸部に一發の彈丸を受け山内は咽喉を一發貫通し居り何れも聊かの苦悶の色も見ぬ探偵の調べたる所に依れば山内は二人を殺したる後彈丸を詰換へたる形跡あり何れも前夜の出來事なりと

▲餘程落着き　居る模樣なるより察するに精神に異狀を來し又は一時激昂の餘りに爲したる仕業とは覺ぬ尚餘程以前より計畫し居り準備を爲し二人の熟睡を見計ひアワと云ふ東の間もあらせず電光石火の間に萬事を解決したるものと察せらるる語り居れりと

▲記念の寫眞　室内には三人が一所にサクラメントにて撮影せる記念の寫眞がピューローの上にありたるがローネー屍を山内の肩にかけいと睦ましげに見ゐたりと人の噂には山内が此婦人と親しくなれるは八年許り前からのことなりと云ふ尚はアデリンの義兄弟等其他の話を綜合して考ふるに山内がローネーに對し何か嫉妬らしきことを云ひたること屢々ありしと云へば多分夫等人知れぬ事情のありしが爲ならむかと

●野遊會夜の吹寄會　來る二十日の實業會主催野遊會夜朝日座に於て吹寄會を催はすとは豫て報道せる如くなるが今日迄に決定せる分は

▲鶴山子代子、藤重繁子▲寄劇有志▲藤巡求美吉野高江、同小藤乃栄▲合奏巡求美吉野高江、同小藤▲芸劇須市演藝會其他

●總領事請演　既報の如く矢田總領事一行は本日午後六時樓臺を經て午後六時半來須の筈にて一行は本日午後六時半來須の筈にて一行は本日午後六時半來須の筈にて一行は本日午後六時半來須の筈にて

●獨立時局演說會　羅府の木下獨立時局演說會は來る十三日午後七時より同市朝日座に於て獨立時局演說會を催し（一）米國憲法上日本人の地位（二）日米交渉の落着（三）歸朝（三）歸國證明書問題に就て演說をなす由

ワワリンビル（十日）

苺の相場

最近南三年好況を續けたる苺類の相場が本年度に伴ふべき如く一般農產物の下落に伴ふべき如く一般農產物の下落に伴ふべき如く一般農產物の下落

FOR AMITY BETWEEN
AMERICANS AND JAPANESE

The Japanese American News

ENGLISH EDITORIAL PAGE
SATURDAY, MARCH 12, 1921 No. 7661

Mr. Harding's Inaugural Address.

The Japanese American News commented on the President's inaugural address on March 5, the following being a liberal translation:

THE SPEECH delivered by the new President, Mr. Warren G. Harding, at the ceremony of his inauguration, was indeed great and imposing. President Harding is a pattern of his day, the leader of his people, and, in his speech, he emphasized his solemn oath in dedicating himself to God, to the people and to his country. At the same time he announced the policy he will pursue during his administration.

His speech is printed in detail elsewhere in the paper. In general, he discusses, at the outset, our present situation. We have witnessed the great storm, he says, and now are standing in an atmosphere in which a new hope is alloyed with remorse.

Going on to a discussion of his internal and foreign policies, President Harding stressed the traditional American policy of non-interference in the politics of Europe. Concerning foreign relations, he proposed a council of all nations, strong and weak, to promote amicable international contacts, reduce or abolish armaments in order to put an end to warfare, and advocated establishment of a court of conciliation.

As for internal policies, he argued the necessity of taking the consensus of public opinion as a basis, bespoke the cooperation of all citizens, industrial peace, the fostering of production, tariff revision. In conclusion he dwelt upon the mission of America.

The President's speech is strongly colored, if not with nationalism then with the new nationalism of America. It is in marked contrast with the Wilsonian internationalism. "Every commitment must be made in exercise of our national sovereignity," Mr. Harding said, discussing the proposed international council. He continued:

"Since freedom imperiled and independence inspired and nationality exalted, a world supergovernment is contrary to everything we cherish and can have no sanction by our republic. This is not selfishness, it is sanctity. It is not aloofness, it is security. It is not suspicion of others. It is patriotic adherence to the things which made us what we are."

This part of his speech is exceedingly brilliant. He clearly and boldly told why the United States does not enter the League of Nations.

We all anticipated such a declaration. Undoubtedly it is right at this point that the majority of American citizens uphold Mr. Harding, as was clearly indicated by the vote last year, but the strength of the new nationalism is noteworthy to a degree.

The policy adopted by Washington, as everyone knows, was to refrain from mixing in the political, military and economic affairs of Europe. It was President Monroe who declared against European interference in American affairs.. And then came Lincoln, who united the nation by mighty ties.

Thus it is seen that it is traditional American policy not to interfere with other nations' affairs, nor to brook interference in American affairs by another nation. But Americans are determined to promote the prosperity of their nation, and, when in accord with the national policy, to render service for the promotion of world and human affairs in general.

The world war is unparalleled in history. After witnessing its ghastliness we have all been convinced that a repetition should not be tolerated. Internationalism, with ex-President Wilson as its conspicuous leader, has advanced with great strides. American citizens, charmed by Mr. Wilson's noble spirit, his erudition and his power of expressing himself, were converted, for a time, to feverish internationalism. But when the war drew to an end they were awakened rudely, looked about them, realized their own country had a brilliant history, and returned to an American nationalism. That is why Mr. Wilson fell from the peak of glory into the abyss. And that is why President Harding's inaugural address is so highly colored with the tint of the new nationalism. We all must expect every internal and foreign policy to follow the blazed trail of this consciousness.

Naval Expansion and Reduction.

The following is a liberal translation of an editorial in Japanese published in this newspaper on March 3:

THE UNITED STATES SENATE recently held an extraordinary secret session to discuss the navy appropriation and proposed reduction of naval equipment in conjunction with England and Japan. The original bill was passed unanimously.

The matters discussed in this secret session were not, of course, made public. But it is reported that the discussion centered about a comparison of American, British and Japanese naval power, naval expansion, and Japanese, American and British American diplomatic relations and policies.

Among the appropriations is the item for the establishment of a great naval base on San Francisco Bay. There is also the Yap Island question. We can imagine considerable time was devoted to a discussion of Japan. Among the various arguments advanced prior and subsequent to the secret session there was a very strong argument by Senator Lodge, Republican, for a positive American policy.

He declared, in the main, that faith could not be placed in diplomatic negotiations with Japan and that it is impossible to deal with that country in the ordinary diplomatic manner. The Yap controversy, he said, is no exception. He doubts the sincerity of the international good faith of Japan and believes the only way to deal with Nippon is to maintain a great navy to press the demands of this country. Senators Phelan, Poindexter and others from Western states expressed unanimity of belief and backed the naval program of 1916.

The battle has been waged in the Senate with Senator William Borah holding the banner of disarmament and others opposed to his doctrine. The naval appropriation with the Edge amendment was passed. It means the United States will continue the construction of warships as scheduled until hers equals the greatest naval power in the world. But on the other hand it opens the way for negotiations with England and Japan for discontinuance of naval expansion for the next five years.

Restriction of armament and reduction of naval power is at present in the state of oral discussion. No country has yet undertaken the task. There is no precedent for disarmament in the annals of international relations. The United States alone cannot undertake the innovation of naval reduction. Therefore we do not wonder at the decision of the Senate to continue the old naval program.

When we compare the Senate resolution directing the government to open negotiations with the governments of Japan and England for an international conference on cessation of warship construction for the next five years, with the bill introduced into the Japanese Diet by N. Ozaki, embodying the same provisions, and turned down by the great majority, we see the vast difference in the attitudes of the statesmen of the two nations.

When we observe, however, the distrust of Japan shown by American statesmen and the apprehension with which they regard the expansion of the Japanese navy, we have a spectacle which is beyond our understanding.

The naval policy of Japan is a continuation of the policy adopted several years ago by the Japanese legislature. It is to build eight battleships and armored cruisers and complement ships and maintain the minimum naval authority necessary to safeguard against attack. In comparison with the British and American navies it is only half or 60 per cent as large. Some United States senators believe Japan in the future will surpass America in naval strength; others are apprehensive, although they do not think Japan will outdistance this country.

Since the division of the American navy into two fleets, one on the Atlantic, the other on the Pacific, the Pacific fleet is perhaps smaller than the entire Japanese navy. But, at any time a need arises, the Atlantic fleet can be sent through the Panama Canal or around South America to the Pacific Ocean. Then the Japanese navy would be almost negligible. In passing the resolution, we imagine, there must have been a scheme among the statesmen in the Senate to overshadow Japan with a greater navy.

Distrust of Japan is not new. But it is growing stronger because of the Japanese policy in China and Siberia, perhaps. If Japan wishes to be on good terms with other nations, to avoid isolation from the concert of the powers, it is of paramount importance for Japan to re-establish her sincerity and truthfulness.

After all is said and done, the basic idea of armament is to make one's neighbors behave. The nation which arms itself by equipping and maintaining army and navy is like the man Robert Louis Stevenson tells of, who had an idea he should make his neighbors good. Stevenson's idea of it is that it is much more important—and safer—to make him happy.

THE OKURA MUSEUM.

ABOUT A MILE north of Shimbashi station at No. 3 Aoi-cho, near the American Embassy, stands an art collection which in its kind is probably unequaled in the world, says Charles A. Parry in the Japan Advertiser. This is the Okura Museum of Far Eastern Antiquities, (Okura Bijutsu-kwan, now officially renamed Okura Shu-ko-kwan or "Collection of Antiquities"), given to the empire by the multi-millionaire Baron Kihachiro Okura at the coronation and now open to the public. It is especially worth visiting in that the exhibits were collected with rare taste and that almost every one is worth examining for its beauty or curiosity. In this it differs from other Japanese museums, which contain many objects of no intrinsic beauty or value, treasured only for their connection with historic characters of no interest except to Japanese.

There was, as every art enthusiast knows, a psychological moment in the history of collecting in Japan. This was about 1868-1870, at the time of the Restoration; and for some years later, when the Japanese, absorbed in the necessity of modernizing their national life, were seized with a sort of reaction of contempt for their old arts. Old lacquer ware, now priceless, was then being sold so cheaply that dealers sometimes asserted it would be more profitable to burn it in order to collect the gold it contained.

It was just at this moment that Mr. Okura, then an enterprising young merchant, began collecting. He seems to have proceeded from the first on a large and well considered plan, with the aim of forming a collection which, whether it eventually became national property or not, would be a credit to his country.

The museum occupies a handsome three-story building, formerly the residence of the owner. It was thrown open to the public two years ago; but the public do not seem to have realized the fact; or else I was fortunate in the day of my visit, for during more than three hours I saw not more than twice as many visitors. No doubt it is too good for "hoi polloi," the crowd, the people who would vulgarize heaven itself. Though not going quite so far as an old acquaintance, a fastidious Oxford scholar, I sometimes remember sympathetically his fervent exclamation: "What a blessing it is that the scum never can get hold of the really good books!"

CEREMONY AT THE GATE.

Pleasant impressions began at the gate, where the gatekeeper, answering my inquiry as to the hours of opening, insisted on my taking a "sip of tea." Tea is poison to me (why eternally tea when there are so many other things?), but I could not refuse what was so politely offered. At the porch, the liveried attendants provided me with shoe-covers and took charge of my impedimenta.

The museum is open Sundays and week days, with the exception of Mondays, from 9 till 3 during the winter half of the year, and till 4 during the other months. The two departments in which it is perhaps unrivaled are the religious art (mainly, but not entirely, Buddhist) of Japan, China, Korea, Tibet and Siam; and lacquer ware of Japan and China.

The staircase, which you ascend on entering, is lined with old images of Buddha from all the countries where this faith is or has been followed. The Tibetan images, like the idols of the older Indian religion, run to multiplicity of heads and arms; one such (eighteenth century) has thirty-two arms and three tiers of heads. Another Tibetan eighteenth century statue, of Shake Nyorai, a coming Buddha, in the landing at the head of this staircase, is a fine work; it is of bronze gilt, about six feet high, sitting cross-legged on an elaborate lotus pedestal, and wasp-waisted—another Hindu characteristic which is also found in most of the Siamese images. The room you then enter contains some very ancient Chinese stone work; a lion (third century), with curls quite in the Assyrian style; an image (sixth century) of the Buddhist Triad; also some bronze fittings dating from the first century, of a carriage, in which, no doubt, "haughty beauties" rode and behaved just as they do now.

Then come more Buddhas, rooms full of them. The Siamese images have a surprised, simpering expression, due partly to exaggerated arching of the brows, partly to a trick of the mouth, with the hands raised, palms spread laterally outwards; they seem to be saying "oh, dear me, I couldn't think of it!" or else "Really, now, you don't say so?" Either is better than the bovine or porcine stupidity that marks so many Japanese Buddhist statues. A case of "one thousand Buddhas and Bodhisattvas" (really about three hundred) wooden images of from two to three inches high, standing in tiers like a font of type or the choir of a Sunday school convention, is Japanese work of the fifteenth century. I am told that the carver of this piece is said to have repeated the formula "Namu Amida Butsu" three times for each cut of his knife. Another bronze Buddha, in addition to eleven pairs of arms carrying symbols, has one pair of triple length, raised above the head with palms outspread, just like the pincers of the crab called by the Japanese manjugani, or "bun-crab."

BUDDHA'S DO NOTHING.

There is great variety in these Buddha-figures of various nations, but they agree in one thing: the Buddha is always doing nothing—unless sitting may be called "doing something"—as compared with the more Nirvanic attitude of complete repose. Why is he nearly always sitting cross-legged? He is sometimes standing, but hardly ever lying down, and never seated in a chair. Can any one imagine an Apollo or a Jupiter stitting cross-legged? Yet nearly half of the human race agree to represent their God-Sage in this posture. It is partly because this, to us, cramped attitude is made natural by habit to Orientals, but mainly because the Buddhists draw a sharp, almost angry, distinction between the beatific state, which is divine, and mere sleep, which is rather vulgar. Of course, the enlightened one, while he seems to the common eye to be merely dozing, is in reality in a state of intense mental activity.

There must be something in this idea of attaining Nirvana while in the body, or it would not have been regarded with such longing by hundreds of millions during hundreds of generations—for it did not begin with Guatama Buddha. As for Nirvana after death, I leave its consideration till the proper time; but, in any case, if absolute calm cannot be attained on this side the grave, this is no reason for not sometimes aiming at that comparative calm which can be attained. It is largely a matter of getting rid of small discomforts. Here is my recipe for Comparative Nirvana:

When you go to bed—none of your cross-legged sitting for me; it involves too many muscles—assume the easiest position; obviously that in which the weight of the body is most supported by the bed. Lie on your back, therefore, on a low pillow (to equalize the cerebral circulation), with arms and legs extended and no part of the body weighing on any other part. Let your breathing be slow and rather deep, without paying more attention to it than you can help. You will notice small discomforts arising from position, clothing, the internal organs, etc.; obviate these as far as you can. Quiet is, of course, essential. Try to think of something pleasant; or, if this is impossible, try to think of nothing at all, though here you incur the danger of falling asleep. Sometimes, if you are lucky and conditions are good, you will drift into a most agreeable state; you will rise as much above the world as the world sinks beneath you. You expand; you fill the room; you fill all space, or as much of it as you want to. Or else, space seems a thing which, if not you, is at least within your power; in inhaling, you seem to draw a pleasant influence from the air, and in exhaling, you feel that you are sending this influence down through your veins to your extremities. Finally, you go to sleep; and it is a very pleasant way to go there.

(TO BE CONTINUED)

O-SOME AND HISAMATSU

FROM "THE SHIPMAN UTA ZAIMON."

BY CHIKAMATSU HANJI.

(CONTINUED FROM LAST SATURDAY.)

AN HONEST OLD MAN was Kyusaku, foster-father to Hisamatsu. Besides Hisamatsu there were three in his family: his wife, his step-daughter, O-Mitsu, and himself. The wife had been ailing for a long time, with the result that O-Mitsu was so busy what with nursing her mother, cooking for the family, and other matters, that she had little or no time for her own toilette, although she was sweet sixteen and very attractive.

Kyusaku's wife had been married before and O-Mitsu was her daughter by a former husband. But the girl was of a sweet disposition and treated Kyusaku as affectionately as she would have her real father. In return, the old man loved her with all his heart. He and his wife had resolved early to marry her to Hisamatsu. They had several times hinted as much to O-Mitsu, and she had heard them with very evident joy.

It was therefore with surprise and grief that Kyusaku learned Hisamatsu was paying court to O-Katsu's daughter. His sorrow and anxiety were intensified when he heard that Hisamatsu had lost 150 *ryo* belonging to his mistress. It seemed to the honest straightforward Kyusaku that he himself was responsible for the missing money, and that, somehow or other, he must make good the loss. He struggled with great resolution, therefore, to raise the requisite amount by selling his patch of land and by borrowing money on O-Mitsu's garments, combs and ornaments. Next he intended to journey to Osaka, repay the money and apologize for the carelessness of his foster son.

Already it was past noon, but he made preparations for the journey. O-Mitsu begged him to wait until the next morning, but Kyusaku refused to delay. He declared he was not too old to walk a dozen to fifteen miles and that he would be back before dusk. Bidding her take good care of her sick mother, he set out for the city.

AN UNWELCOME VISITOR.

Kosuke, accompanied by Hisamatsu, arrived soon after his departure. Kosuke had come in obedience to the command of his mistress to take the young man, for the time being, to his father's home, until the mystery of the lost money should be cleared up. Kosuke determined to seize this opportunity of abusing the innocent youth, and compel him to renounce all idea of returning ever to the oil shop.

Bursting into the house, Kosuke cried: "Is Kyusaku in? Hisamastu has committed a serious misdeed, so I have brought him back from Osaka."

Hearing Hisamatsu's name spoken, O-Mitsu rushed out, exclaiming joyfully: "Oh, Hisamatsu San! How happy I am to see you back!"

Kosuke broke in: "You should be saddened, not glad, that Hisamatsu has returned. He has stolen 150 *ryo* and spent it on geisha. So I have been sent to demand immediate repayment of the money from Kyusaku. If he refuse. I shall hand over Hisamatsu to the authorities."

"Oh!" cried the girl, "impossible! Hisamatsu is incapable of stealing. The charge is false. Tell him you are innocent, Hisamatsu!"

But Kosuke would not give him the opportunity. He said: "If Hisamatsu could have explained away the charge, I would not have been put to the trouble to bring him here. Is Kyusaku here? I wish to see him. He appears to be a poor peasant, leading a hand-to-mouth existence. It is clear he cannot pay such a huge sum. Nevertheless, I desire to see him. Call him out, girl!"

"Indeed, sir," answered poor O-Mitsu, "father is not at home. He set out for Osaka only a short time ago. Did you not pass him on the road?"

KOSUKE GROWS ABUSIVE.

"Gone to Osaka!" Kosuke cried in irritation. "That's a lie! It it were true I should have met him. He must be in hiding about the house. I'll have a look-see."

Kosuke started for the inner apartment. O-Mitsu resolutely blocked the way.

"My mother is in that room, ill. Speak a little more quietly, sir, if you please."

Roughly pushing her aside, Kosuke grapsed the *shoji*. Hisamatsu could restrain himself no longer. Seizing the intruder by the collar, he said:

"Take care, sir! Our mistress has ordered me to return home and to remain with my parents for the time being. She did not instruct you to act in this manner."

"Turn me loose!" Kosuke roared. "You are a thief! How dare you speak to an honest man in this manner?"

Wrenching himself free of Hisamatsu's grasp, he struck the youth a stinging blow in the face. Hisamatsu crumpled to the floor. Kosuke kicked him.

Horror-struck, O-Mitsu could but look on and wring her little hands. But at this moment Kyusaku returned unexpectedly. O-Mitsu rushed to him and threw her arms around his neck.

"Father!" she sobbed, "Hisamatsu is in trouble. Help him!"

Without pausing to ask questions, the old man seized Kosuke and sent him sprawling to the floor.

"Kyusaku!" yelled Kosuke, struggling to his feet. "You have your nerve to throw me down on the floor, you decrepit old beast!"

(TO BE CONTINUED.)

JAPANESE AS IMMIGRANTS.

A REPORT by sociological experts on immigration traits, published January, 1921, in the series of Americanization Studies, has this to say concerning the Japanese in America:

"The thrift, cleanliness, quickness, sobriety, industry, adaptability, eagerness to learn, of the Japanese are everywhere recognized.

"Precisely because of their historical traits of allegiance and organization the Japanese are capable of transforming their lives and practices more rapidly than any other group. . . . They are inclined to make more far-going concessions than any other group in order to overcome American prejudice and secure status here.

"The Japanese are making extraordinary efforts to be assimilated. They are not citizens, but their children are, and they wish them to be. They are anxious to break up their own colonies, to engage in all sorts of occupations, to acquire American manners, and to get education—all with the motive of adapting themselves to this country. Whether we like them or not, no other foreign-language group is so completely and intelligently organized to control its members, and no other group has at all equaled them in the work of accommodating themselves to alien conditions."

The report is entitled, "Old World Traits
*The report is entitled, "Old World Traits Transplanted." It is by Robert E. Park, University of Chicago, and Herbert A. Miller, Oberlin College, and is published by Harper and Brothers.

WHEN THIS OLD WORLD WAS YOUNG.

(Continued from Last Saturday.)

GOD OF LITTLE CHILDREN, Jizo, makes calm the troubled sea. He is the most lovable of Buddhist divinities, with attributes somewhat similar to Kwannon, Goddess of Mercy.

Although of Buddhist origin, Jizo is essentially Japanese. He is the creation of innumerable Japanese women who have longed to project into the infinite, into the shrouded beyond, a deity who should be a heavenly father and mother to the souls of their little ones. Jizo is a god essentially of the feminine heart, not a being to be buffeted about by the controversies of theologians.

Any study of Jizo will reveal him to be of a nature and characteristics that reflect all that is best in the woman of Japan. He reveals her love, her sense of the beautiful, her infinite compassion. He has all the wisdom of the Lord Buddha himself, with the important difference that Jizo has waived Nirvana and does not sit upon the Golden Lotus, but has become a beautiful self-sacrifice, the divine playmate and protector of Japanese children. He is the god of smiles and long sleeves, the enemy of evil spirits, the one being who can heal the wound of a mother who has lost her child in death.

To the Japanese mother who has laid her little one to rest in some cemetery, all rivers wind their silver courses into the place where the ever-waiting, ever-gentle Jizo is. That is why mothers who have lost their little ones write prayers on little slips of paper, and watch them float down the rivers on their way to the great spiritual father and mother who will always hear their petitions with a loving smile.

Clara A. Walsh has caught the spirit of the god in her poem entitled

AT JIZO'S SHRINE.

Fronting the kindly Jizo's shrine
The cherry blooms are blowing now,
Pink cloud of flower on slender bough,
And hidden tracery of line.

Rose dawn against moss-mellowed grey,
Through which the wind-tossed sprays allow
Glimpse of calm smile and placid brow,
Of carven face where sunbeams play.

Dawntime, I pluck a branch, and swift
Flutters a flight of petals fair;
Through the fresh-scented morning air
Down to the waving grass they drift.

Noontime my idle fingers stray,
Through a fair maze of bud and flower,
Sending a sudden blossom-shower
From the sweet fragrance-haunted spray.

Low in the west the red fire dies,
Vaguely I lift my hand, but now
Jizo is not—nor cherry bough—
Only the dark of starless skies!

(TO BE CONTINUED.)

Passion makes man a beast, but wine makes him worse.

* * *

Patience is a plaster for all sores.

* * *

Peace comes after contest.

* * *

Pick and choose and take the worst.

THE SWALLOW.

By DR. E. A. STURGE.

IF ONE should kill a swallow
Some harm would surely follow;
The people call them messengers divine.
They build against the walls
Of chambers and of halls
Their nest of clay, where'er they may incline.

The gods would, in their ire
Consume one's house with fire,
If one should harm these servants of the skies;
These birds have naught to fear,
For people hold them dear;
Their visits seem like angels' in disguise.

These birds that swiftly fly
Are welcomed. Farmers vie
In building little shelters for their nests;
For country people know
How many things that grow
Are saved by swallows from the insect pests.

THE LANGDON SHOOTING.

SEVERAL widely divergent accounts of the shooting of Lieutenant Langdon in Vladivostok recently by a Japanese sentry have been given wide circulation. Here is the sentry's own version of the affair, given in a letter which he wrote to his family:

"It was about 4:20 in the morning on the 8th. As I was on duty as the sentry, a mysterious man came right in front of me and tried to look at me with the aid of a flash light. I called out three times in Russian to stop, but the mysterious person paid no heed.

"I ran after him and again ordered him in Russian to stop. The mysterious man at last stopped and I asked him whether he was a Russian or an American. He answered in Russian that he did not know. Then the man advanced toward me and I thought he might attack me. Therefore I took the position of charging him.

"He started to go the other way. His act aroused my suspicion more and I called out that I would shoot if he tried to run away.

"All of a sudden he discharged his pistol. I returned fire. As I used my gun, he staggered a few steps to his left and discharged three or four more times at me. I tried to fire once more, but the case left by the first shot was still in the barrel of my gun and did not discharge.

"I tried to reload the gun in a hurry but in the meantime the man had run away, so I fired at his back. By this time the guard appeared on the scene and I told him what had happened and the guard at once followed the man, but he could not be found. Soon the time came for me to be relieved from duty, and I went to the officer of the day and reported what had happened.

"The officer commended my action. When I took off my overcoat I found a bullet had pierced it. But I was not injured. The officer of the day and I searched the way the man ran and found traces of blood a little west of the scene of the firing, and after following some more, we found a pistol on the ground. Later I was told that the mysterious man was an officer in the American Navy. My fire took effect and he died."

By SOSEKI NATSUME.

(Translated by a Japanese Schoolboy.)

RETURNED TO HOMES, I feel as though I have accomplished transferrance of mysellufs from sunny summit to darkest caves.

Whilst I was spieing I did not notice for a little abouts the decolations and ornamentul screens and so forth et cetera in that house because I had many other things to be obsverved by me, but now I just nacherully realize how our house was plumb out of compallison and at same times I had a longings for that house they denounce as commonplace.

Somehoworother, I thought, business mens are more as important as schools teacher. I thought that are strange feelings and have consultation with my sapient tails and it declared "yea, verily!"

Considering to myself this "Yea, werily!" saying, I find Mr. Meitei rooting himself there as I entered into the rooms. He stuck unnumberless cigalet butts in ashes of fire pots and sitting on floor legs akimbo, like sly tailor or Turkish one, been talking something. I have no means of knowing when he came to there, but here also were Mr. Cold Moons. The elegant masters were lieing on mat making own arms into pillow and making obserwations on leaky marks on ceiling where rain drips protruded through. Yes, it certainly are a social of recluses of a peaceable times.

"Missy Cold Moons, it were a secrets not revailed on the name of lady who entertained a liking about you that she could not help calling you in her dreams but aren't it about high time to be makeing a certain announcements?"

Thus Mr. Meitei opens up teaser.

"I shall all right if it concerned only me I were announcing, but when I pause to considder emballassments it will cause to pass, I ain't somehow in strategic position to disclose."

"Not yet, huh?"

"Besides and furthermore and moreover, I gave my plomises to Madame."

"Not to tell ennybuddy?"

"Yes, sure," articulate the Cold Moon, trifling his cord on haori. The cord in view is not like obsverved in ordinary shops with color all purple. The elfish master comments on it whence he is lieing.

AN ANTIQUATED FRIPPERY.

"That cord are wee tiny weeny bit old funsioned, I bet." He are so evidently unconcerned about this Kaneda affair.

"Oh, yes, it are no production of Japanese-Russo war age, all rightie. It will fit to go with old style jingasa hat and equally old fashioned haori with fambly crests on it and eberything. When Oda Nobunaga were married to the hairess, it were remarked he dressed his long hair chasen styles. And if my memoly are exact, it were selfsame kind of cords he used to dress his hairs."

Per usual Meitei's explanation are so long drawn.

"Fact, this are one were worn by father when he embarked on revolutionary uprising or enterprise of Choshu long times agone."

Explained the Cold Moon seriously.

"Why don't you give it at Muslum? The lecturer on the Dynamix of Hunging Onesulf, Missy Cold Moon, M. S., will mar his lesprect if he persists on wearing such cord like rumnants of fragpole."

"I should like to accord with your adwice, all righto, but only there are someones who say it appear to look so pretty on me——"

"Who are that person who spreak such tasteless thing?" demands egotistic master loudly as he turned himself.

"You don't know that person——"

"Never care whether we know or don't. But who are that person, I insist?"

"Her are a female lady."

"Ha! ha! hee!" explode Meitei. "You are so drolly exsentrick. Shall I explain her name? She are same woman who called you from basin of River Sumita? How about kicking up heels of your feets once more?"

"Indeed, but she are not summoning me out from depth of stleam. She are at the plesent in direction of northwest, where all are so purifyed——"

"No so wery pure and sanctity. It's so fiendish nose!"

"Are?" Kangetsu compose suspricious face.

"The nose of the alley yonder invaded into here such short times ago. Yep, sure, here! Both on us were so supplised. Ain't is so, Kushami."

Elegant masters sipped tea supinely and answered "I regret it are."

"Who do you contemplate by nose?"

"Why, poor silly dear, Mrs. Nosey, of course. The ma of your dear distant relationed female lady."

"Indeed?"

A TIMELY EXPLANATION.

"A woman as calls herself as wifes by Kaneda came to here to make enkwiry about of you," explain exact master serious like.

I were intently watching whedda Kangetsu will bent on supplise, or gladness, or bashfullness, but I detect no sign of alteration of his faces. He maintain quiet tones per usual and ejaculate, as he toyed with his ornamental cord of haori:

"I suppose she desire me to marry to her daughter."

"Far from it. This mother person is proprietor of gleat nose——"

Meitei was half emerged in talk when the eely-mosynary master cut in the fashion of making wood graft bamboo:

"Say, fiends," he drall, "my have been laboring in composition of short poems on that nasal."

Hearing of this, the house lady begun to chuckle softly at herself in subjoining room.

"You indeed are carefree, sure enough. Have you got it?"

"Yes, I are got it in parts. The first stanza say:
"A feast of nose on the face."

"And?"

Naxt it say:
"To offer a libation at the nose."

"Horrors! And?"

"That are all I am inspired as yit."

Kangetsu were smiling all around his face, so he say:

"That were intelesting."

"How would it be," suggest Meitei quickly, "to add:
"'Two vague opening could be spyed?'"

The Cold Moon also submit stanzar:
"Goodness knows her nose——"

Thus they are all talking at one another randomly, and on street, close to shrubbery, numbers of people clambored:

"Imado China badger!"

Elite master and Missy Meitei supplied and tryed to peak thru shlubbery.

"Haw! Haw!"

They laughed and their footprints were heard as they ran away far.

"What do they signify by 'Imado Chinar badger?" Meitei demand of entellectual master.

"I don't know what it portend," insist eldtrly masters.

(READ ALL ABOUT NOSE NEX' SATTIDY.)